山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第121集

山梨県南巨摩郡増穂町春米地内

大明神遺跡

富士川西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査

1995
山梨県教育委員会
山梨県農務部

山梨県南巨摩郡増穂町春米地内

大明神遺跡

富士川西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査

1995

山梨県教育委員会

山梨県農務部

序　　文

本報告書は、山梨県南巨摩郡増穂町の富士川西部広域農道建設事業に先立ち発掘された大明神遺跡についての成果をまとめたものであります。

増穂町は歴史的に見ると、山梨県内でも古代より仏教と非常に関わりの深い土地柄であります。天平年間に建立されたと伝えられる最勝寺をはじめ、鷹尾寺・金胎寺が存在しており、また今回の調査地点である春米地区では、1985年から1988年まで権現堂遺跡学術発掘調査団が実施した発掘調査の結果、平安時代末に製作されたとみられる大量の泥塔とこれに関連する焼成遺構が検出されております。

さらに、春米地区には、真言古談林七箇寺の一つである明王寺（熊野神社）が存在し、今回の調査地点と明王寺が非常に隣接しており、明王寺境内全図にうかがえる別当寺が調査範囲に含まれるのではないかとの見方もあり、目下のところ検討中であります。

さて、今回の大明神遺跡の発掘調査は、農道建設という性格上から長さ300m幅10mの細長い調査範囲であり、完全に調査できない遺構もありました。しかし、結果として10軒の住居跡と51基の土坑からかなる弥生時代末～古墳時代初頭の集落や近畿東海系の土器を発見することができました。この他、縄文時代早期の土器や遺構、中世の溝や石積を確認することができました。

この様に、歴史的に大きな意味を持つ町で新たな歴史的事実を発見できたことは非常に喜ばしいことであります。

本書が、地域住民の方をはじめ多くの方々の学習や研究資料としてご利用いただければ幸甚に存じます。末筆ながら、本調査にご協力いただきました関係機関各位、地元住民の方々、調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1995年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　大塚　初重

例　　言

1　本書は、山梨県南巨摩郡増穂町春米字大明神に所在する大明神遺跡の発掘調査報告書である。
2　今回の発掘調査は、富士川西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財の調査であり、山梨県教育委員会が県農務部の委託を受けて、1993年（第１次調査）・1995年（第２次調査）に行なった。
3　発掘調査・整理調査及び報告書の作成は山梨県埋蔵文化財センターが行ない、同機関の森原明廣・宮里学が第１次調査を、高野玄明・宮里が第２次調査を担当した。
4　本書は、高野・森原・宮里が協議の上執筆を分担し、宮里が編集した。
5　本書掲載の遺構写真の撮影は高野・森原・宮里が行ない、遺物写真の撮影は宮里が行った。
6　石積み遺構・航空写真については、株式会社アイシーによる。
7　本書に掲載されている出土品・図面・写真などは全て山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8　調査参加者については第１章を参照されたい。
9　発掘から報告書刊行に至るまで次の方々・機関からご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。
（敬称略・順不同）
小島利史（増穂町教育委員会）・増穂町農業土木課・同税務課・東京電力株式会社・株式会社アイシー
井上達郎（地元協力）・弦間千鶴・柏木まつ江・山田静代・山梨県学術文化課・山梨県農務部・峡南土地改良事務所・池谷建材・周辺住民の皆さん

凡　　例

1　本書に掲載されている図版は基本的に磁北を上に組んである。
2　本書に掲載されている図版の縮尺は各個にスケールを付けた。
3　遺構図版に用いたLEVELは海抜を意味し、単位はｍ（メートル）である。
4　色調の表記については『標準土色帖（1990年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究所色表監修）に基づき記述した。
5　遺構図版・遺物実測図版にあるスクリーントーンは各個にその意味を示してある。
6　グリッドについては、東西をアルファベット大文字、南北を算用数字であらわした。各グリッドの呼称については北西隅にある基準杭の名称を使用している。
7　遺構の計測値について平板測量による実測図をもとに、住居の場合は長軸と短軸、面積は測定器を使いその平均値を記載した。土坑については長軸と短軸とした。また、重複や撹乱により正確な数値が出せない場合は、残存の数値を（　）で囲み記載した。
8　本報告書は、埋蔵文化財の発掘調査記録であるため、地域の皆さんをはじめ、より広くの方々に理解していただけるよう極力平易と考えたが、専門用語や独特な表現も各所にみられるため、とくに児童の方は巻末を読んでいただけれは、大明神遺跡の様子をご理解いただけると考えている。
さらに不明な場合は、県埋蔵文化財センター・県立考古博物館に問い合わせの上、ご利用していただきたい。

目　　次

序文
例言・凡例・目次
第１章　調査概要と方針
第１節・・・・・調査に至る経過 …… 1
第２節・・・・・調査組織 …… 1
第３節・・・・・調査方法 …… 1
第４節・・・・・調査日程 …… 2
第５節・・・・・普及活動 …… 3
第６節・・・・・基本土層 …… 3
第２章　環　　境
第１節・・・・・調査区周辺の地理的環境
第２節・・・・・調査区周辺の歴史的環境
第３章　調査報告
第１節・・・・・縄文時代の遺構と遺物 …… 9
第２節・・・・・弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡と遺物 …… 13
第３節・・・・・弥生時代末～古墳時代初頭の土坑 …… 38
第４節・・・・・溝・溝状遺構 …… 45
第５節・・・・・石積み遺構 …… 46
第６節・・・・・包含層の遺物 …… 47

遺跡のポイント

発掘調査風景

出土したばかりの土器

第１章　調査概要と方針

第１節 調査に至る経過

平成４年度に、山梨県農務部より富士川西部広域農道建設の計画路線上にかかわる埋蔵文化財の存在について照会が県教育庁学術文化課にあり、平成５年５月に県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した。この結果、埋蔵文化財の存在が確認され農務部・学術文化課・埋蔵文化財センターの三者が協議のうえ本調査を行なうに至った。

調査予定地には、高圧線や畑灌が埋設されているなどいくつかの障害があり、調査可能な約300㎡に対して第１次発掘調査を平成５年９月６日から同年11月16日まで実施し、古墳時代初頭の１号住居跡および土坑20基などを調査した。

その後、調査を行なう上での障害が処理された連絡を受け、未調査範囲1,000㎡を第２次発掘調査として平成７年６月12日から同年９月28日まで行ない発掘調査を終了した。この発掘調査に関わる書類手続きは以下のとおりである。

（第１次）
平成５年５月10日　　山梨県教育委員会から文化庁宛発掘通知の提出
平成５年12月17日　　鰍沢警察署長宛に遺物発見通知を提出
（第２次）
平成７年６月７日　　山梨県教育委員会から文化庁宛発掘通知の提出
平成７年10月４日　　鰍沢警察署長宛に遺物発見通知を提出

第２節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
　教　育　長　　加藤正明（平成７年３月31日まで）
　　水上和彦（平成７年４月１日より）
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
　所　　長　　大塚初重
　次　　長　　三科英訓（平成７年３月31日まで）
　　穂坂　忠（平成７年４月１日より）
　埋蔵文化財指導幹　　森　和敏
調査担当　第１次　県埋蔵文化財センター文化財主事森原明廣・同文化財主事宮里　学
　　第２次　　同　　主任文化財主事高野玄明・同文化財主事宮里　学
調査参加者（順不同）
（第１次調査作業員）西脇　誠　荻原光代　関口愛子　樫本志郎　坂本逸郎　山村文平　長坂清　武田きく江　志茂　博　雨宮利光　石井関造　井上文一　大森朝市　大森ゆきえ　立川なつじ　芦沢留市　望月利雄　望月とめ子　望月いよ子　笠松美代子　芦沢よし子　秋山みずゑ
（第１次整理作業員）森田良子　市川祥子　中川美千子
（第２次調査作業員）熊谷真樹子　村松義仁　一瀬一浩　北村さつき　加藤　誠　深沢　都　矢崎裕美　河野正之　石井関造　井上文一　大木和雄　志村福雄　河住照雄　河住ふさ子　大森ゆきえ　立川なつじ　望月利雄　望月いよ子　秋山みずゑ　河野なみ江　河西好恵　依田友弘　鮎沢恭子　河野静雄
（第２次整理作業員）森田良子　熊谷真樹子　村松義仁　斎藤育子

第３節　調査方法

調査区域堆積状況については試掘調査の結果などから、現地表面から遺構確認面までの深度が深いところでは２ｍ以上にも及んだ。これは、利根川・秋川の流路移動や氾濫によるもので、人頭大の礫を含む厚い砂礫層の堆積であった。従って、土砂崩落防止の安全管理のためノリ面をつけるなどの対策をした結果、有効な調査区域の幅は８ｍ前後と狭いものになった。

このため国土座標による基準点の設定よりも任意の地点に設定し、調査区内により多く杭を設定した方が効率的な調査が進行できると判断した。これに基づき５ｍ四方のグリット（Grid）を設定し、東西ラインでは南側より、０から始まる番号を算用数字で振り、南北ラインでは西からＡから始まる大文字アルファベットのラインを設定しその組み合わせで各グリットの名称付け、基準点とした。

表土並びに堆積土は第１次調査では施設物の関係上重機の導入が不可能であり、一部重機を用いたが基本的には人力に頼るものであった。２次調査時には施設物の移動がなされ重機の導入が可能になり、表土並びに砂礫層の除去は重機で行った。

遺構実測や遺物取り上げについては、杭を基準として主に平板を用いて作図した。遺構については、平面図・セクション図・エレベーション図すべて縮尺は1/20を原則としたが、特殊遺構については縮尺1/10も併用して作図した。遺物取り上げについては、一括を除く出土遺物全てに通し番号をふり、平板に出土位置とレベル測量器で測定した高さを記録し処理を進めた。

写真撮影では、遺構については断面および掘り上がりの状況を、遺物については出土状況を記録することを主にした。

第４節　調査日程

（第１次調査）

・平成５年５月13日から21日　試掘調査
・平成５年９月６日　本調査開始　現地事務所設営等
・平成５年９月13日から　人力による掘り下げ開始
・平成５年９月24日から　包含層遺物の取上げ開始
・平成５年10月６日から　遺構の検出・実測作業・遺構写真撮影作業等開始
・平成５年11月12日　撤収作業
・平成５年11月16日　発掘調査終了

（第２次調査）

・平成７年６月６日　本調査開始　現地事務所設営等
・平成７年６月12日から21日　調査区南側より重機による掘り下げ開始
・平成７年６月15日から　包含層遺物の取上げ・遺構の検出作業等開始
・平成７年７月11日から　遺構調査開始
・平成７年８月17日　調査区北側着手　石組み遺構等検出
・平成７年９月26日　重機による埋め戻し作業
・平成７年９月28日　発掘調査終了

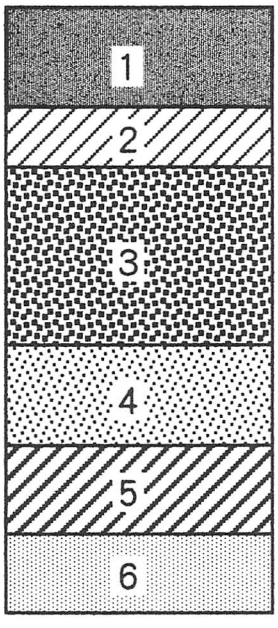
第５節　普及活動

山梨県埋蔵文化財センターでは、各調査現場により現地説明会を開催し、多くの方に埋蔵文化財の理解と地域史の公開に努めている。しかし、大明神遺跡では調査区内の障害により現地説明会を実施することはできなかった。

一方では、遺跡の調査状況や成果を速報的に紹介するＡ３版の新聞を作成し、周辺住民を対象に各方面への配布をはじめ、山梨県考古学協会と共催で行われた1996年度上半期遺跡発表会（平成７年12月16日山梨学院大学にて開催）に出土資料や写真資料二十数点を展示公開、また県埋蔵文化財センター主催「山梨の遺跡展’96」（平成８年３月16日～４月７日県立考古博物館にて開催）にも出土品を展示するなど、一人でも多くの方に、埋蔵文化財に対する理解と、大明神遺跡を発掘したことによる成果を知っていただこうと取り組んできた。

第６節　基本土層

調査範囲の基本土層についてのべる。調査区は南北に長いことは述べたが、両端における堆積状況に極端な変化はない。しかし、扇状地という地形のため、流出した堆積物の各地点における有無によって多少の変化を見ることはできる。また、現況の地面と遺構確認面までの高低差は南で数値が高く1.5ｍを測り、北にむかって減少する傾向にあり、北端では0.7ｍ程度である。記載した土層観察は、遺構・遺物が集中した調査区南側から中央部にかけての堆積状況である。



第１図　　基本土層図

1　表土層　平均30cmの堆積。小礫を多く含む耕作土。
2　暗褐色土　粘土質土。混入物はなく、調査範囲内では部分的に存在する。遺物は中世から近代の土器片などを含む。
3　砂礫層　平均50cmの堆積。径40～100cmの礫と砂で構成さる。粘質土を含み、固く緻密な堆積。
4　砂礫層　平均20cmの堆積。径５～50cmの礫と砂で構成され、粘質土を含み、固く緻密な堆積。
5　暗褐色土　平均30cmの堆積。遺物包含層。径５cm以下の礫を多く含み、粘性が強い。
6　黄褐色土　遺構確認面。径５cm以下の礫を多く含む粘砂質土。

調査区南側西壁の堆積状況

第2章　環　　境

第1節　調査区周辺の地理的環境

増穂町は、甲府盆地の西端で南巨摩郡の一番北に位置している。町全体の８割以上を山地が占めている。平坦な土地が少ない地形であるが、北東側に甲府盆地を一望できる好景観な土地柄である。

町は、農業及び果樹栽培を主としており緑豊かで最勝寺・明王寺などの名刹も多い。現在の中心部は富士川に沿って走る国道52号線の青柳周辺の商業地域を中心して栄え、隣接する鰍沢町商業地域と連なっている。かつては、富士川の黒沢・鰍沢・青柳の河岸を中心に江戸方面との流通の中継地点として大きく発展した。近代化になっても需要性は変わらず、富士川の河岸と盆地中心部を結ぶ甲府～青柳間を峡西鉄道が走っており、県内交通機関としてその重要性を認識されてきた。しかし戦後、国道52号線・甲州街道の整備、国鉄中央線・身延線を始め中央高速道路・主要幹線道路の整備に伴い廃線となっている。

調査地点は、増穂町役場の北北西1.6kmの地点にあり、標高は約270m前後である。地形としては西側には巨摩山系が存在しており、また調査地点の南側を流れる利根川と北側を流れる秋山川により形成された東傾斜の複合扇状地である。この巨摩山系山麓と扇状地扇頂部の縫合線付近が遺跡の立地環境である。

このため、今回の調査でも明らかになったが表土以下に拳大から人頭大以上からなる砂礫層の堆積が確認された。砂礫層の堆積高は厚いところでは１ｍを測り、地形形成の起因が河川の氾濫や流路移動による堆積であることを裏付けている。

第2節　調査区周辺の歴史的環境

調査地点周辺の埋蔵文化財の分布

調査地点周辺の埋蔵文化財については遺跡分布図に示したとおりである。分布の傾向として、本調査地点の東側（富士川）方向には15・16・17・18・Ｗしか認められず、扇央部から富士川の間では分布が希薄なのに対し、本調査地点から南北方向の山麓から扇頂部にかけて分布が集中する傾向が読み取れる。増穂町内でも本調査地点の春米と利根川を挟んだ最勝寺の二つ分布が分かれる。増穂町南部でも同じように山麓から扇頂部・山間部にかけて分布が集中する傾向がある。

また、櫛形町の一之瀬台地周辺で分布の増加が伺え、白根町周辺では山麓を中心に分布がまとまる傾向がある。

時代別に分布を見ると、縄文時代分布は２・３・４・５・10・11・20～23とＡ～Ｄ、平安時代分布は権現堂遺跡の他４ヶ所と少なく、弥生時代から古墳時代の分布は１・３～23とＥ～Ｘと分布が密である傾向が窺える。平林地区を含めると縄文時代の分布が若干増加する。一之瀬台地については縄文時代に属す分布が密な傾向がある。

調査地点周辺で特に注目すべきは１・６・８・９・12～14、Ｐ～Ｘの後期古墳群の存在である。分布や各個の規模現状は消滅したりして詳細は不明で、現在までのところこれら分布している古墳に対して調査が行われたという経過はない。『増穂町誌』や『甲斐考古』に山本寿々雄・坂本美夫氏らが９の法華塚古墳周辺から表面採集された資料の報告をされており、倣製鏡二点・変形四獣鏡一点・勾玉二点の存在が知られている。これらの遺物から見ると法華塚古墳は後期古墳群に属すよりも五世紀に造られたものとした方がよいと考えられている。いずれにせよ、この後期古墳群については山梨県の最南端に位置するものであり性格付けは今後期待されるものである。

周辺の分布の中で調査経緯のあるものは、遺跡分布図中の●印の権現堂遺跡と平野遺跡がある。

平野遺跡は弥生時代末を主体とした集落跡で１992年に山梨県埋蔵異文化財センターが、1995年には隣接する地点の調査を増穂町教育委員会が実施している。1992年では20,000kmを調査し弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡と25軒、土坑4基などが確認され、住居跡すべてが焼失家屋であることや石包丁の出土など貴重なデータを提示している。1995年の調査では、600㎡の調査で同時期の住居が９軒、土坑２基が検出され４軒が焼失家屋であることが判明した。本調査地点と距離的には南に２km離れた地点であるが、時期や住居の規模・形態には類似

性が見える。

権現堂遺跡は、1985年から88年にわたり6次にわたる学術調査が実施された経過がある。調査の結果、平安時代末（11世紀代）の泥塔焼成遺構と推定500基の泥塔が出土し、仏教関係遺跡として位置づけられている。

この様に、調査地周辺は弥生時代から古墳時代にかけての埋蔵文化財の分布が多く、おそらく古代の人々は地形的要因のもとこの地域を選択し、その結果密な分布地帯になったことが考えられる。

[地名由来]

遺跡名には小字名を使って大明神遺跡とした。ここで少し地名について少しまとめておく。字名である春米の由来にはいくつかの解釈がある。全国的な「つきよね」の地名由来についてみると、地形的に山麓などの微高地に存在することが多く、増穂町春米も地形的に見れば巨摩山系山麓と扇状地扇頂部の縫合線付近というの立地環境であり、この類例の中におさめることができる。

確認されている文献資料から見てみると、春米の地名が文献に登場するのは慶長六年（1601）の検地帳に「西郡筋槻米村」という記載がみえる。この他にも「徳川家奉行連署寄進状」「元禄郷帳」、大森快庵『甲斐業記』のなかでも槻米という表記がみられる。槻米という表記について、「慶長古高帳」では地名として槻米と春米の両方の表記が書かれており、両方の表記はともに増穂町の同一地域を表しているのと思われる。つまり、春米を一般的な表記としたのは江戸時代の中頃以降でそれ以前は槻米か両者を併用して使用しれていたのであろう。

もう一つ、地名の由来を歴史的にみてみると中世付近に存在した雨鳴城や北山城の米をついたことから「つき米」となったという考えや、永正四年（1507）の『勝山記』になかに「又御本寺鐘ヲツキヨ子ノ岩見守ヨリ記進至候」という文があり、一節の「ツキヨ子」が由来になったとも考えられている。さらに、前述した槻はケヤキの一種で、弓作りの材料とされ付近に存在した雨鳴城や北山城などに弓または材料を供給していたことに関連しているのかもしれない。

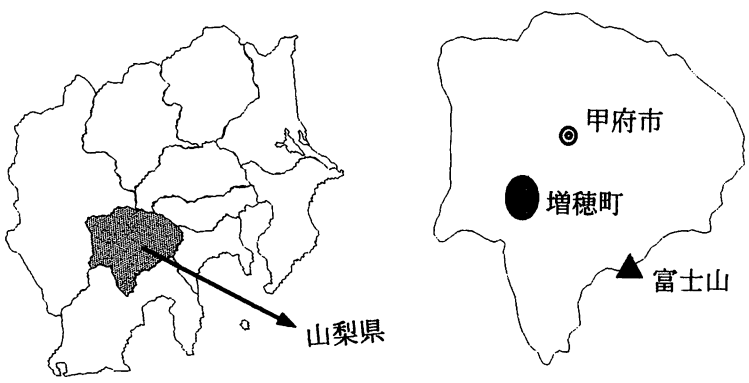
ちなみに、「春米」はつきよね・つきしね・つきよねと読まれ、稲穀の籾がらを除去したものを意味している。春米という言葉自体は、古くは大和朝廷の時代まで遡り朝廷直轄の屯倉に春米部が置かれたことが文献から伺え、中央に対し租として米を納める役割を担っていた。これは律令国家成立後でも多少意味合いを変えるが中央に納める租を担う人達であった。春米部の置かれた屯倉は延喜式では中央近隣や輸送に便利な地域に置かれたとされる。このことからすると増穂町春米は距離の点から除外されるが、後述する寺院の関係も含めて否定できるものではない。

遺跡の名称になった字名の大明神については、寛文年間（1660～1672）の検地帳では春米地区には42の小字名が確認することができる。この中に大明神という小字名が確認でき、寛文年間以前の慶長検地には見つけることはできない。

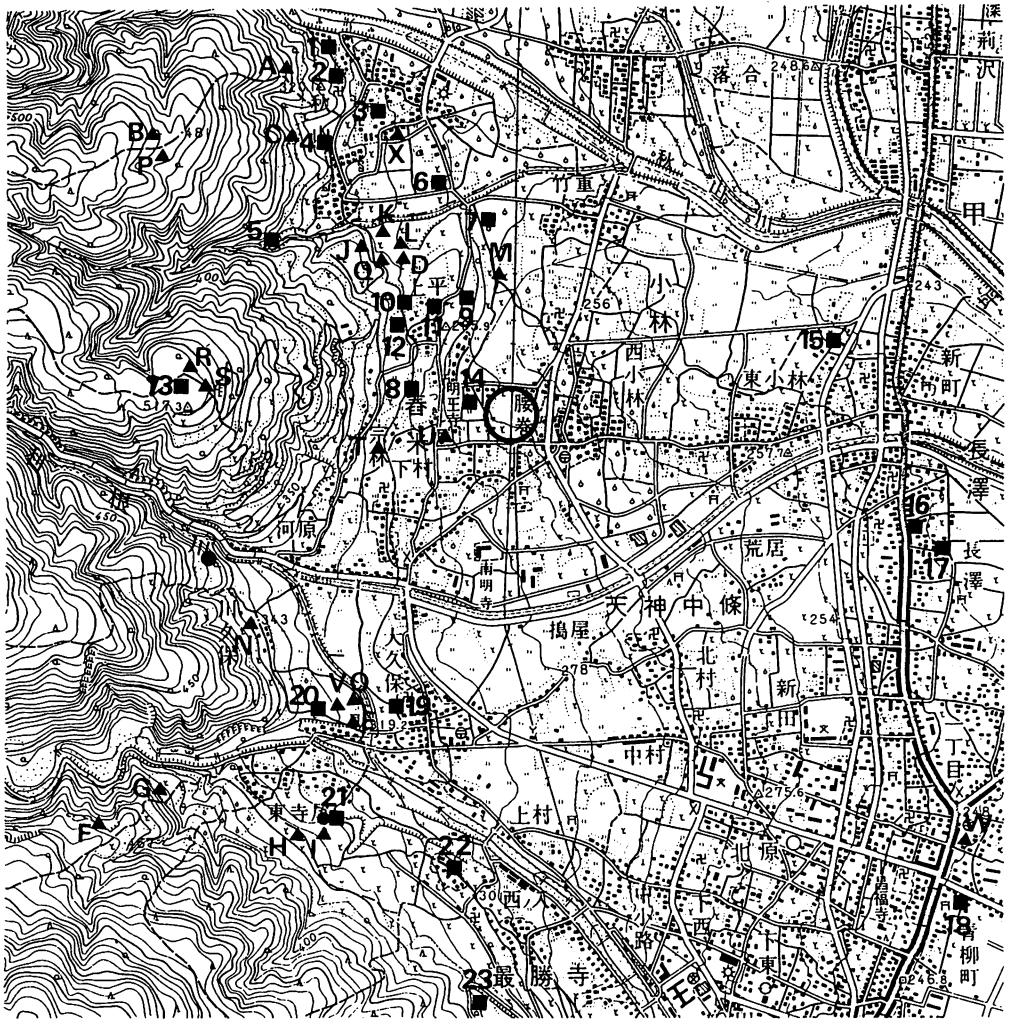
[明王寺]

調査地点の南側の道路には熊野神社の鳥居がある。熊野神社は明治初頭の廃仏毀釈により成立したものだが、本来この地には宝亀元年（770）に儀丹行円により建立された明王寺である。現在も並立しているが、明王寺は大聖金剛山息障院明王寺といい不動明王を本尊としている。寺伝の『明王寺境内全図』に描かれているが社寺領は広大で、多くの別院・末寺をもった。絵図から今調査の際に関連施設・遺物の検出も予想された。武田信玄の時代には先勝祈願の寺として、江戸時代でも多くの寺社領を持ち甲斐真言宗檀林七ケ寺となる名刹である。

国指定重要文化財の木造薬師如来立像、「貞王三年銘」をもつ鰐口、県指定文化財不動明王版木を所蔵する。



(1／2500)



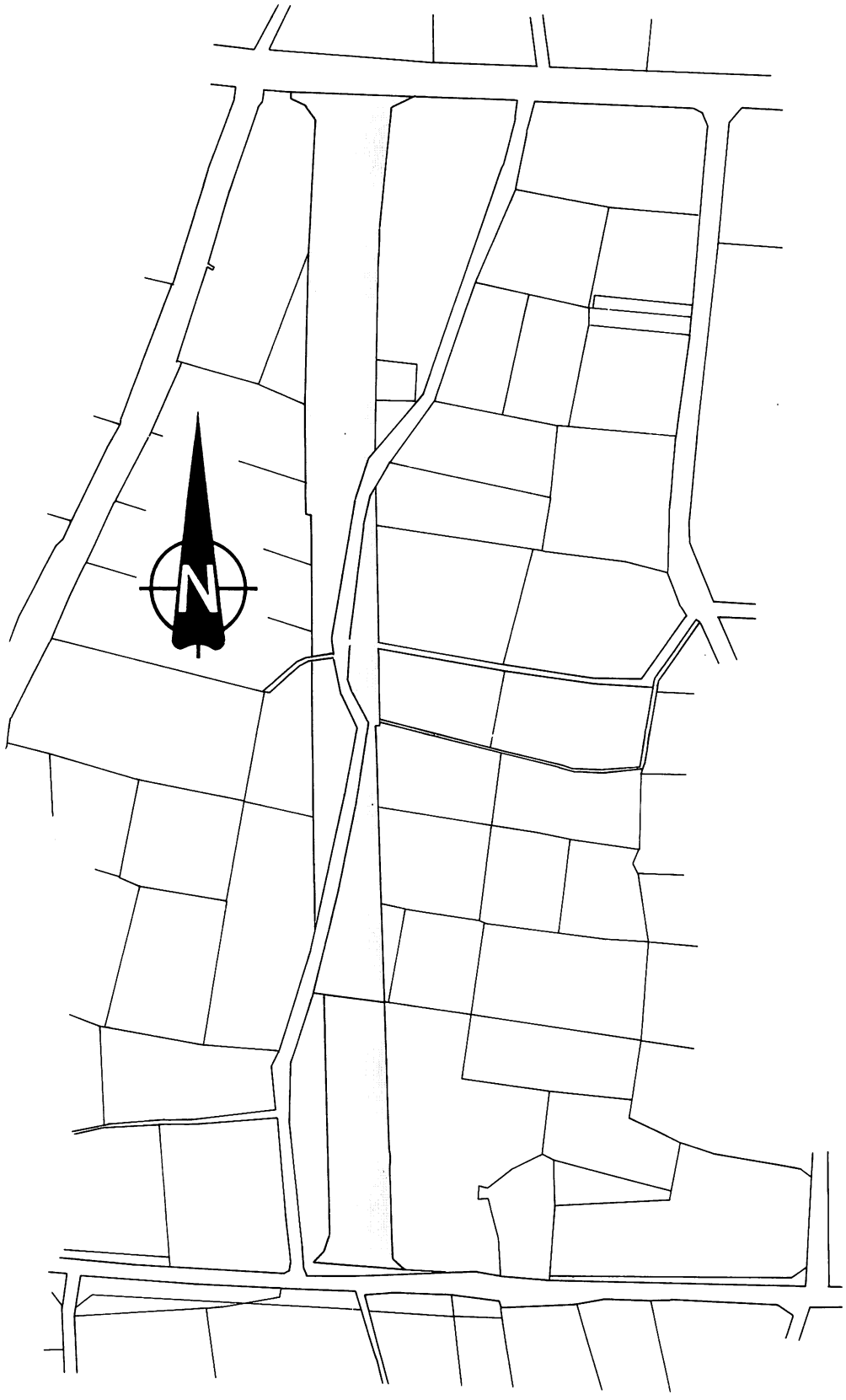
○：大明神遺跡第１・２次調査地点

●：発掘調査の経緯がある遺跡　権現堂遺跡（平）　『権現堂遺跡』増穂町教育委員会1989

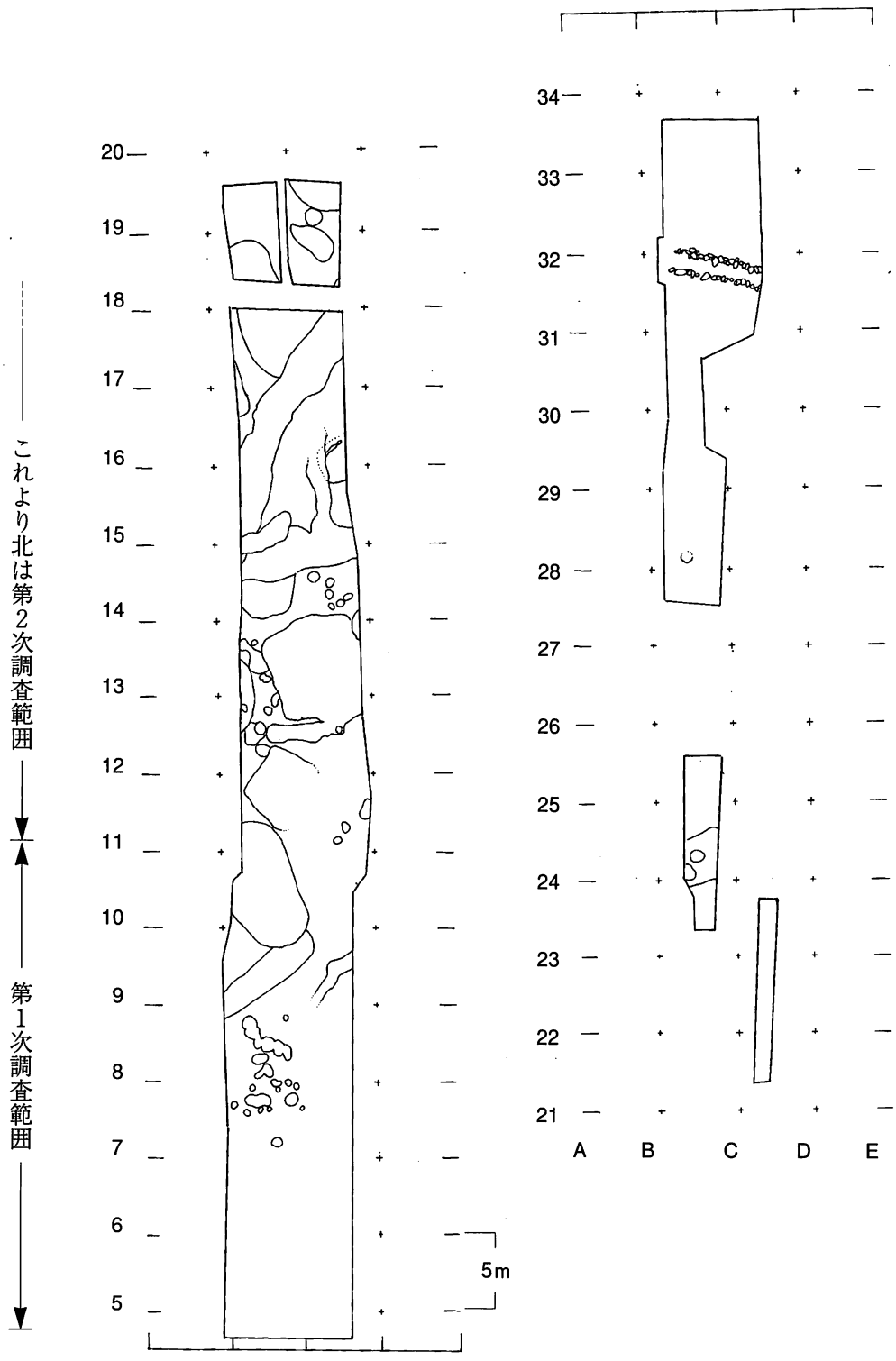
■：『全国遺跡地図　山梨県』文化庁文化財保護部発行（1981）に掲載されている埋蔵文化財分布地
１丸山塚古墳（円墳）２北沢遺跡（縄）３熊野神社遺跡（縄・古・中）４角屋敷遺跡（縄・古・平）
５山居（縄・弥）　６大明神塚古墳（円墳）７小林竹重遺跡（弥・古）８塚穴古墳（円墳）
９法華塚古墳（円墳）10春米北山遺跡（縄・古）　11春米上平遺跡（縄・古）12狐塚古墳（円墳）
13藤塚古墳（円墳）14二十三夜塚古墳（円墳）15長沢新町安静の池遺跡　（弥・古）
16長沢平地遺跡（弥・古）17長沢長池遺跡（弥・古）18青柳遺跡（弥・古）19大久保広見遺跡（弥）
20春米　中尾田遺跡（縄・古）21最勝寺平野遺跡（縄・古）　22最勝寺西の八遺跡（縄・古）
23 最勝寺大堀田遺跡（縄・古）

▲：『増穂町誌』増穂町誌刊行委員会（1982）の上巻に掲載されている埋蔵文化財分布地
Ａ～Ｄ・縄文時代　Ｅ～Ｉ・弥生時代　Ｊ～Ｏ・古墳時代　Ｐ～Ｘ・古墳（遺跡名は不明）

埋蔵文化財分布図



調査対象地


これより北は第2次調査範囲
第1次調査範囲
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
5m
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
A
B
C
D
E

調査区・遺構全体図

第3章　調査報告

第1節　縄文時代の遺構と遺物

概要

縄文時代の遺構と遺物は、調査区の南側で検出されている。調査区の北側では検出されておらず、該期の土器片が若干表面採取されている程度である。

縄文土器の出土状況は、胴下半部が欠損しているが、土坑覆土中から出土した事例と、胴部を欠損する２／３の残存状況で、土坑覆土中から石匙１点とともに出土した２事例が遺構に伴い、また自然礫が密集し高台を形成している地点で、土器片が集中的に出土している事例が確認された。

両者は至近距離にあり、周辺からは黒曜石製の石鏃小破片のほか、剥片・砕片も出土している。

土器については、両者の土器片を比較すると類似性がうかがえ、胎土には繊維が含まれていることが観察できる。さらに、土坑出土土器を接合し、周辺出土の土器とあわせた結果、縄文時代早期後半に位置付けられる土器群で、この他近畿・東海系土器も出土している。石器類については明確にできないが、出土状況からみて土器との共伴であると考えられる。

以下に、各遺構ごとの詳細を記述する。

Ｃ－11遺物集中地点

位　　置　　Ｂ－９グリッド

規　　模　　長軸170cm　短軸125cm　高低差30cm

形　　状　　円礫や砂が高まりを形成した様相で、自然堆積と判断した。

重複関係　　なし

堆積状況　　拳大以下の円礫・亜円礫が遺構確認面より20cmほど小高く堆積した状況ありで、掘り込みを伴う遺構は確認されていない。礫の堆積は人工的であるという明確な根拠は得られなかった。

出土状況　　３１点の土器片が自然礫の高まり周辺に集中して確認された。出土位置は、礫堆積の表面部分で出土することが多く、礫を除去したが、その内部から出土したものはない。堆積状況は地理的環境で詳述したとおり、調査地点が扇状地であることから、外部からの流れ込みとも考えられたが、土器片には顕著な摩滅痕跡は認められないので、高まり形成後に廃棄されたと考えている。

出土遺物　46・49号土坑とは異なり、破片ばかりの出土である。

１　口縁部のみ。胎土には若干の繊維と粒子の細かな雲母・石英がみられる。胎土は緻密で、口縁下５cmのところの表内面ですす状の付着物が認められる。表面は横、内面は縦方向の整形痕がみられる。口縁が波状で、無文である。

２　口縁部付近。胎土は石英を多く含み、繊維が観察される。横方向の隆帯に爪形文を施す。

３　口縁部から胴部付近の破片。胎土に繊維を含む。表内面にすす状の付着物。無文。

４～６　接合関係は認められないが、同一個体と考えられる。口縁部付近。胎土に繊維を含み、やや粗である。無文である。

46号土坑

位　　置　　Ｂ－９グリッド

規　　模　　長軸72cm　短軸70cm　深さ45cm

形　　状　　平面は正円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

重複関係　49土坑と重複関係にある。南壁が44土坑の北壁を切り取っているため、平面プランでの状況では46号土坑は49土坑より新しいといえが、土層断面では明確に判断することができなかった。

堆積状況　　３層に分層できる。底部はレンズ状堆積だが、上部はなだれ込みの堆積である。土器は底部から10cm上の高さから出土している。

出土状況　　１個体分が北壁側にまとまって出土している。胴下半部は存在しないが、大きく３つの破片になり、横位の状況である。出土位置は土坑底部より10cm程の高さである。破片は小破片もあるが大型が目立つ。土器以外は出土していない。

出土遺物　　口縁は26cm、器高は底部欠損であるが推定48cm。無文である。

胎土に繊維をみることができるが、密である。胎土中には石英と雲母の粒子が観察できる。表面は、横方向に整形されているが、内面は凹凸が目立つ。口縁から下約10cmのほぼ全周にすすが付着し、タール状の付着物も観察できる。胴部下に付着物は観察できない。内面はすす・タール状の付着物がまだら状に観察できる。

49号土坑

位　　置　　Ｂ－９グリッド

規　　模　　長軸170cm　短軸125cm　深さ37cm

形　　状　　平面は不正円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

重複関係　　46土坑と重複関係にある。詳細は46号土坑記載のとおりであり、49土坑は46号土坑より古いといえる。

堆積状況　　３層に分層できる。底部はレンズ状堆積だが、上部はなだれ込みの堆積である。土器は底部のレンズ状堆積層から出土している。

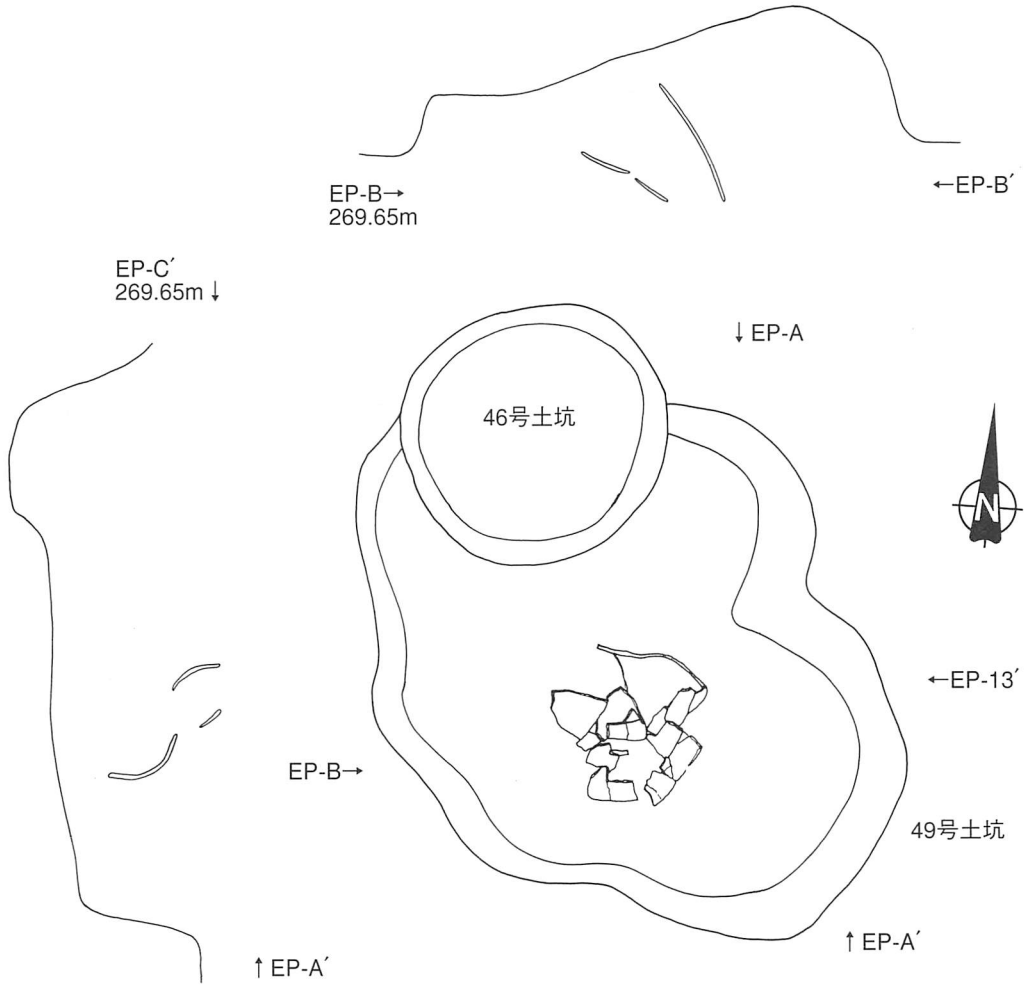
出土状況　　１個体分が土坑中央のやや南側でまとまって出土している。口縁から胴下半部にかけて１／３欠損している。口縁部を上位にし、傾いた状況で出土している。出土位置は土坑底部より10cm程の高さである。出土状況からみて、埋没後に土圧で押し潰されたことが考えられる。土器以外は石器が出土している。

出土遺物　　口縁は29cm、器高は底部欠損であるが推定45cm。

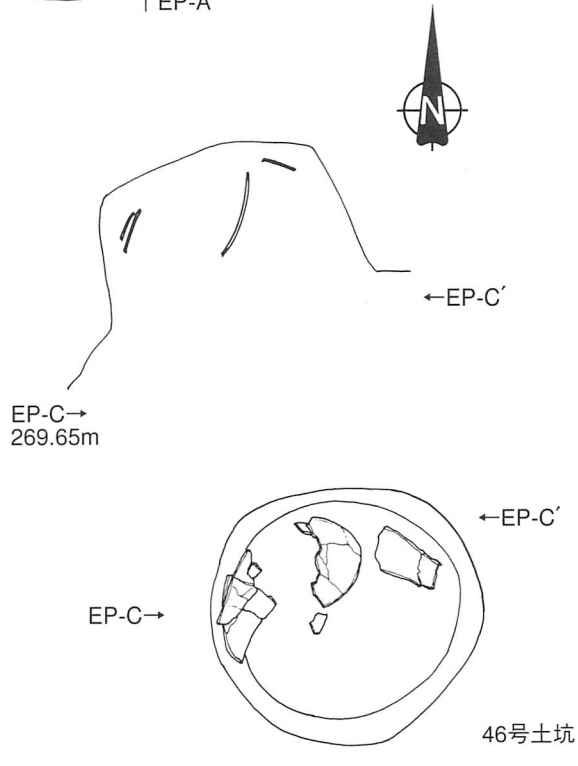
胎土に繊維をみることができ、器厚は46号土坑出土土器より厚く、緻密である。胎土中には石英・雲母の粒子と粒径３mm程度の礫が多く混じる。表面は、整形されているが、内面は凹凸が目立つ。口縁から下約12cmのほぼ全周にすすが付着している。胴部下に付着物は観察できない。内面はすす状の付着物が、口縁下18cmのところから下部に向かい観察できる。

接合はしていないが、底部が出土しいている。器厚が薄く、胎土に礫が混入せず、長石が観察できるため同一個体である可能性は少ない。むしろ46号土坑出土土器に類似する。底部の大きさは15.5cm。摩滅が激しい。内面にはタールが付着し、表面には縄文の施文がみられる。

石器は覆土中から石匙が１点出土している。チャート製。5.8×3.2×0.8cm、重量13ｇ。完形品である。加工は背・腹面から全周にわたり細かく施されているが、刃部は背面のみの加工である。



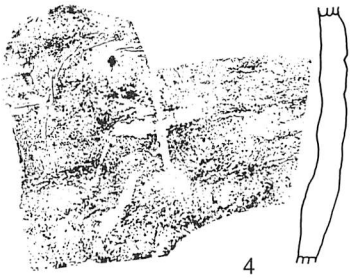
46土坑　縄文土器出土状況



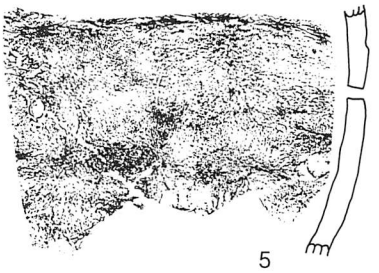
縄文時代　46・49土坑遺物平面・エレベーション図（S＝1／20）

1

2



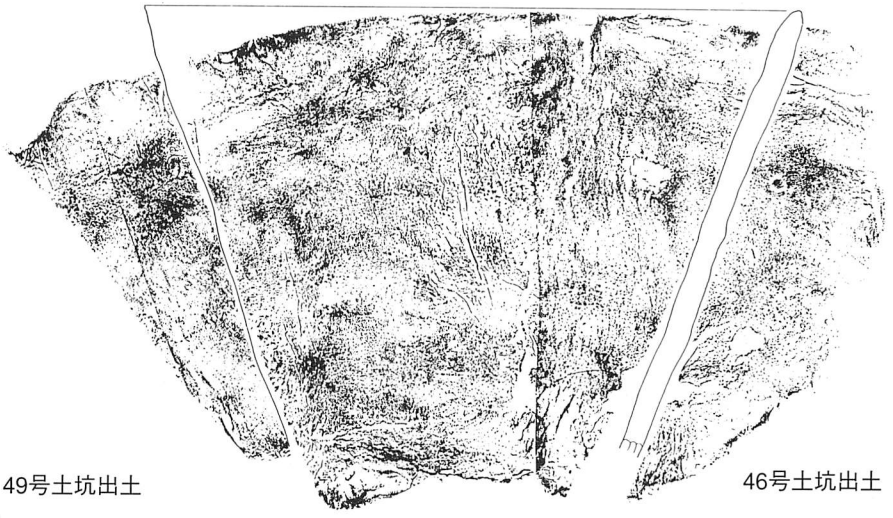
4



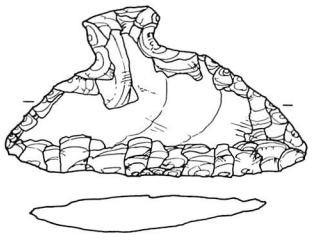
5

C-11出土

3



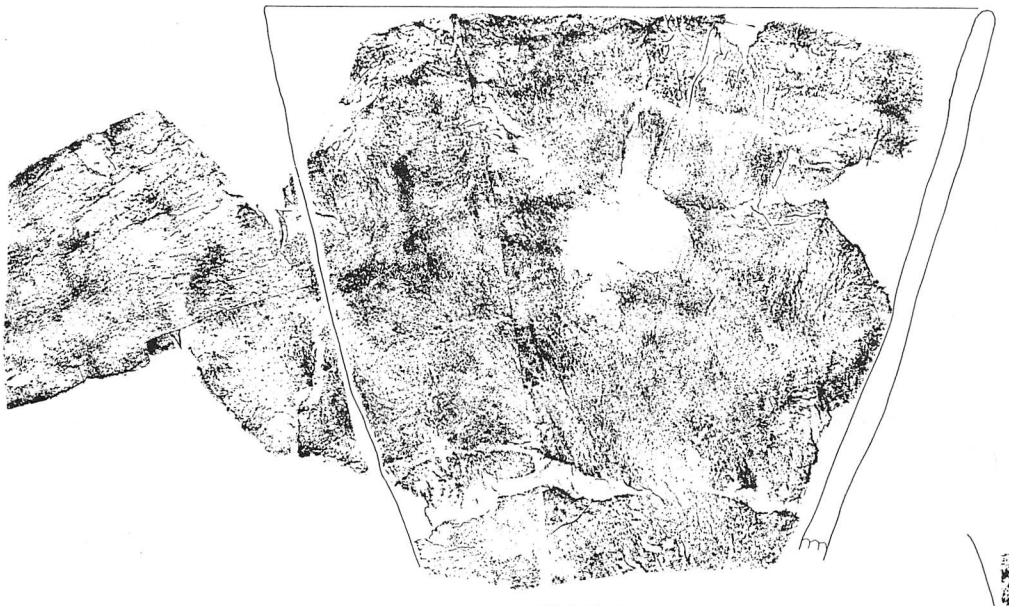
46号土坑出土



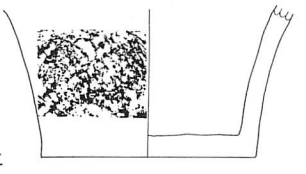
49号土坑出土

0 5cm

石器のみ



49号土坑出土



49号土坑出土

0 5cm

縄文土器　実測図

第２節　弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡と遺物

今回の調査で検出された住居跡は合計10軒である。この10軒の住居跡に対し事実記載を以下に述べていくが、記載にさいし、位置・検出状況・主軸方向・形態と規模・付属施設・壁・床・炉・重複関係・使用回数の項目を設定してある。

位置については５ｍ四方のGridを基準にした所在地点、検出状況については各住居跡の確認から調査に至る経過、主軸については住居跡の方位を用いた傾き、形態と規模では住居跡の平面形態と長軸・短軸、面積を記載した。長軸と短軸は、遺構の上面を測点として残部の長短を計測した。また、調査区域外であったり重複関係により計測できない場合は（　）を用いて表現した。面積については、1／100に縮小した図面をもとにエリアラインメータ TAMAYA PLANIX5000（タマヤ計測システム）を使用し測定したものである。測定方法は、ストリームモードによる同一区画の測定を調査区壁面の下場ラインを測点としてを３～４回繰り返し行い、その平均値を表示した。

柱穴については主柱穴に限り記載した。壁・床・炉は規模や位置その他特徴を記述した。重複関係は土坑や溝との新旧関係を明記し、使用回数は住居跡の建て替えや拡張が認められるものについてその回数を記載した。

１号住居跡

位置

Ｂ－９・10・11　Ｃ－９・10グリッド

検出状況

第１次調査において、遺構確認のため包含層を掘り下げ中に、第１次調査区北西隅に土器の集中出土が認められ、遺物の取上げと精査を繰り返したところ、地表下150cmのところで楕円形のプランが確認された。住居跡であることを想定し、セクションベルトを設定し調査を進めたところ、住居跡壁面の立上がりが確認され、床面より10cm上から台付甕の破片などが出土した。

これにより、第１号住居跡と名称をつけ、第１次調査ではおよそ南側半分を調査した。

第２次調査では、１号住居跡の位置が確定できていたため、包含層の遺物を取上げながら調査を進行させた。

主軸方向

Ｎ－28°－Ｗ

形態と規模

小判形　長軸7.47ｍ×短軸4.42ｍ　面積（23.698）m^2

住居内施設

柱穴　第１次調査では大小含め５ヶ所の掘り込みが確認されたが、主柱穴となるのはＰ３・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ12であろう。

壁　　削平されて全体的には10～20cmの壁高であるが、残存の良い所では40cmの壁高が計測された。

床　　貼り床、硬化面は確認されなかった。レベルは、壁周辺が高く中心部に向かって若干ではあるが低くなっている。

炉　　なし。ただし、中央部の床面から２～３cmの炭化材が多量に検出されている。状況は１ヶ所に集中しているというものではなく、中心部に散在している様相である。

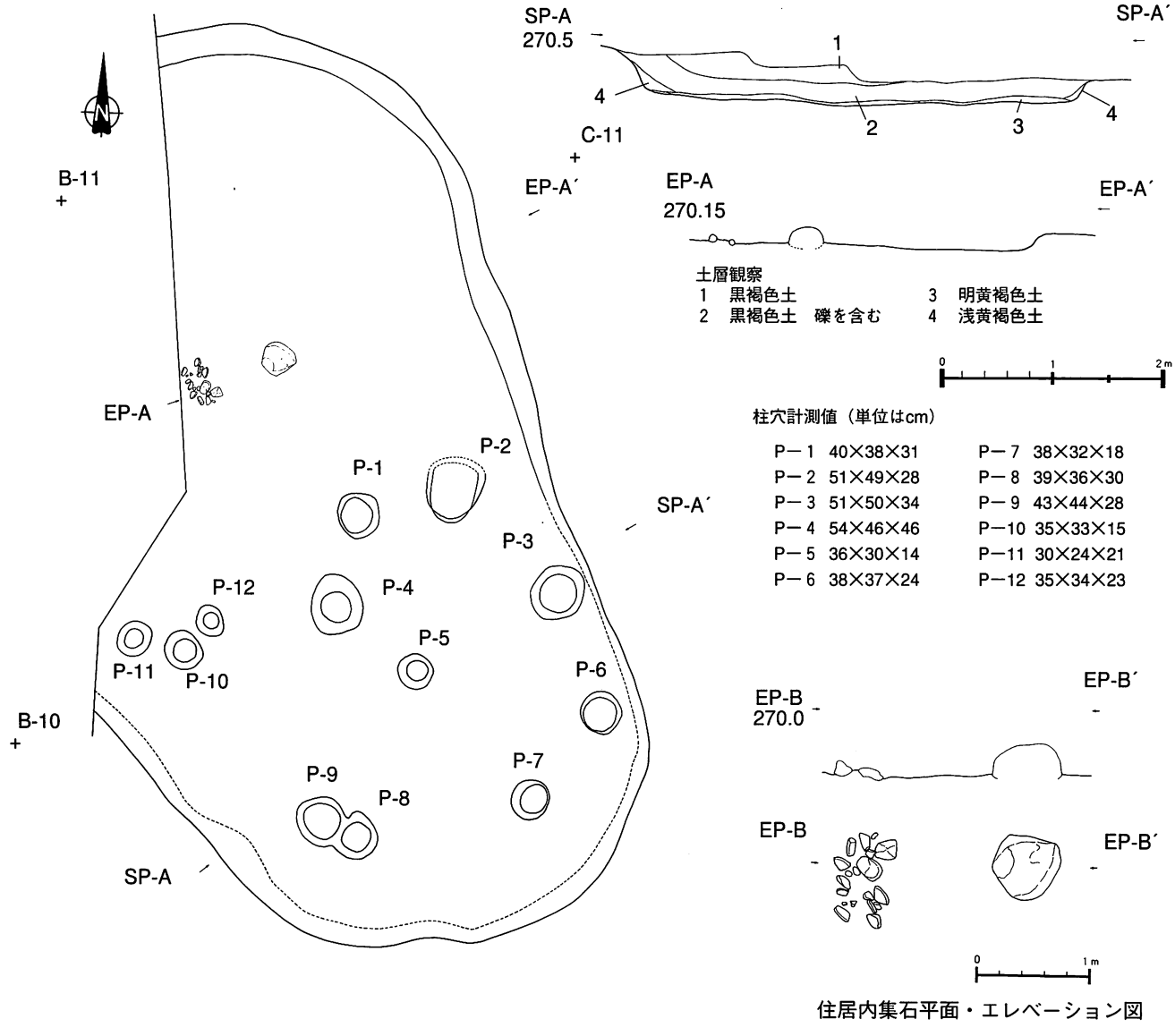
周溝　なし。

重複関係

なし。ただし、西側の一部未調査は調査区域外のため未調査である。

使用回数

１回



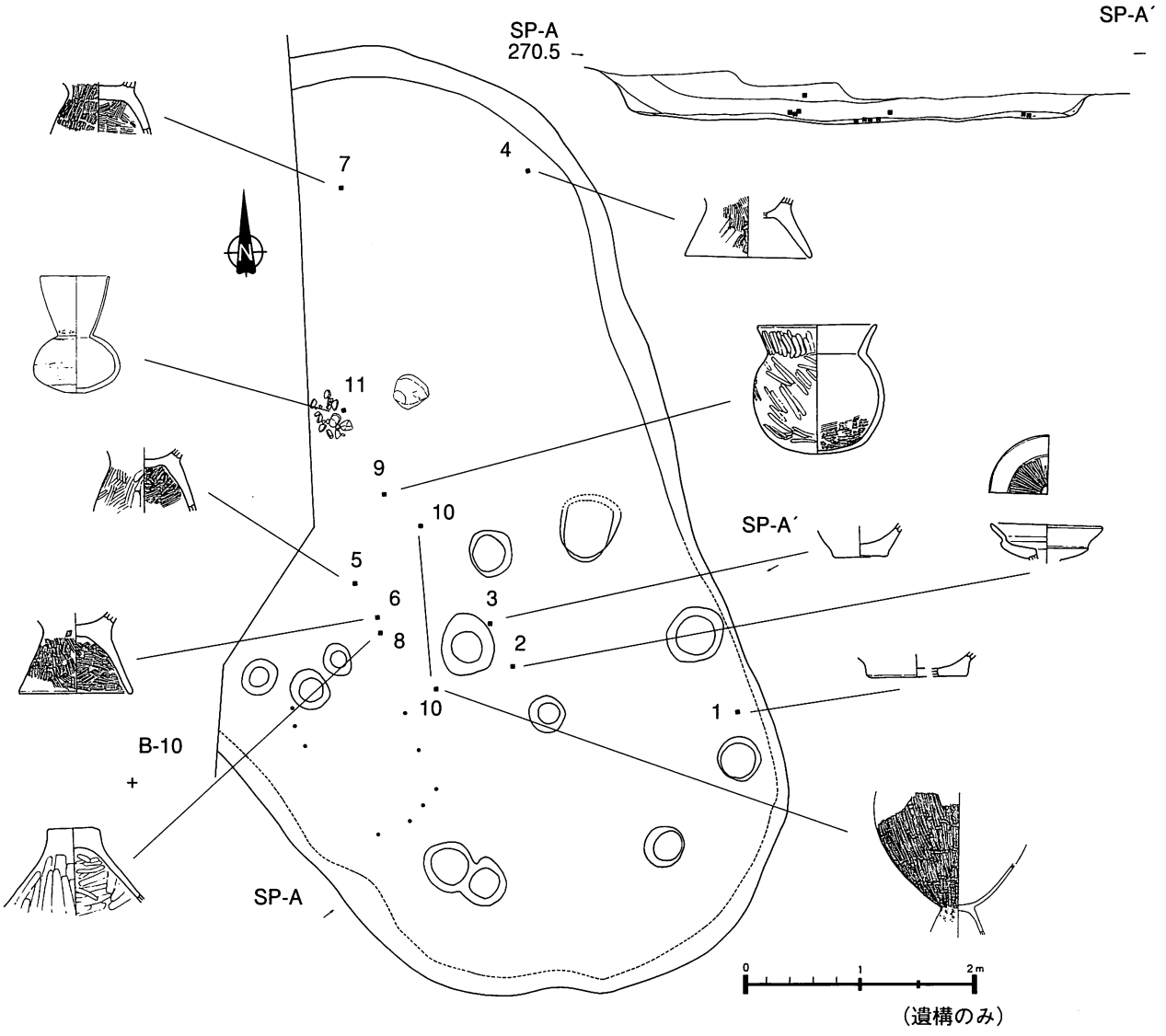
住居内集石平面・エレベーション図

1号住居跡　平面・セクション・エレベーション図

出土遺物

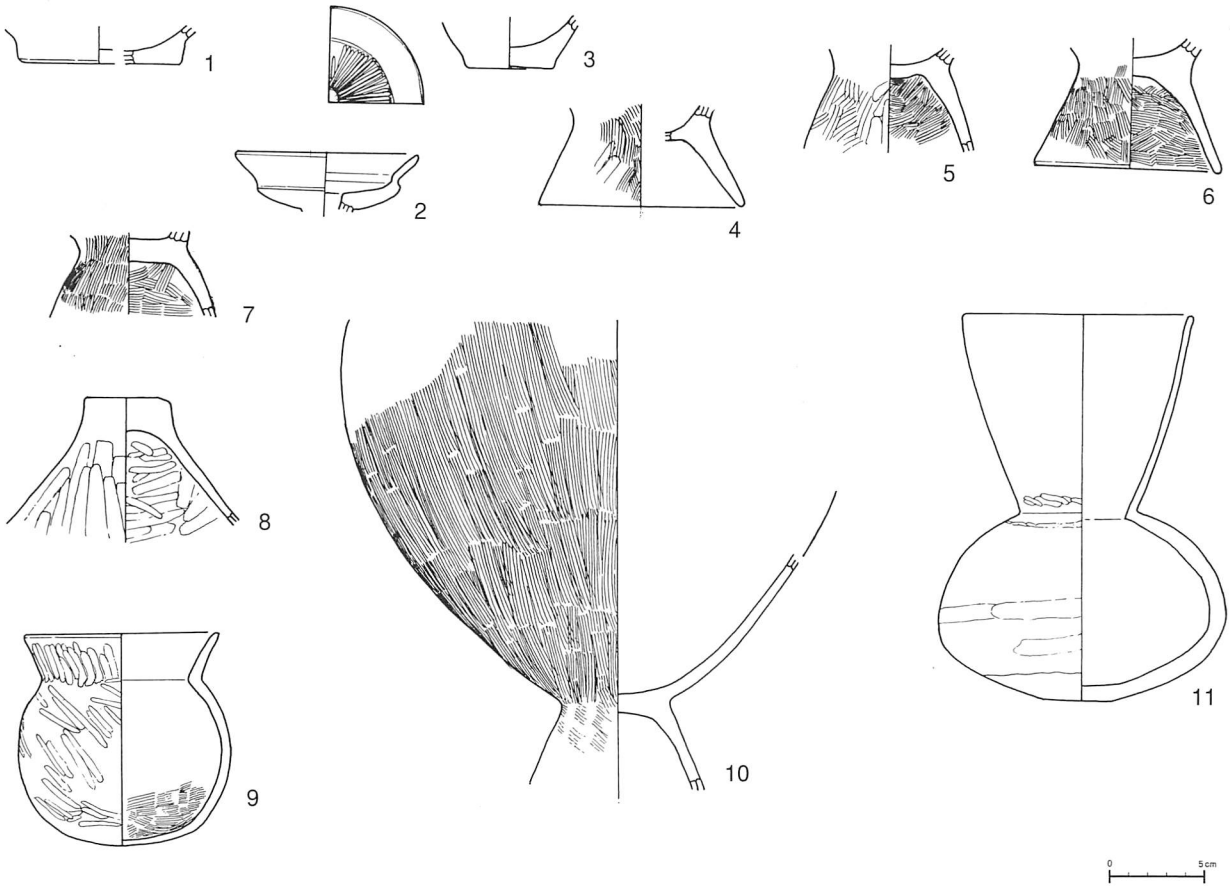
プラン確認段階から住居覆土の遺物出土量は多いが、破片が主体であった。完形品あるいは残存状況が良好な資料は、住居床面のレベルに近くなり集中している。出土状況については分布図のとおりで、住居の中心部で、床面より若干レベルが上がったところから散在して出土する傾向がみて取れる。

1　器種は甕の底部。住居南東部で出土した。胎土に雲母・石英粒子を含む。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。2　器種は器台の坏部のみ。住居中央部で出土した。胎土に粒径1mm程度の礫が目立つが、ほかと比較してきめ細かい。表面と内面の口縁部付近は横方向のナデによる成形、内面は底部は中心から放射状に広がる暗文が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。3　器種は甕の底部。住居中央で出土した。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。4　器種は台付甕の脚部。住居北東部で出土した。摩滅がほかの住居内出土土器より激しい。胎土に雲母・石英粒子を含む。表面は縦方向、内面は横方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。5　器種は台付甕の脚部。住居中央部で6・8と並び出土した。胎土に雲母・石英粒子を含む。表面は縦方向、内面は横方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。6　器種は台付甕の脚部。住居中央部で5・8と並び出



1号住居跡　遺物出土平面・垂直分布図（●印は3cm以上は炭化材出土位置）

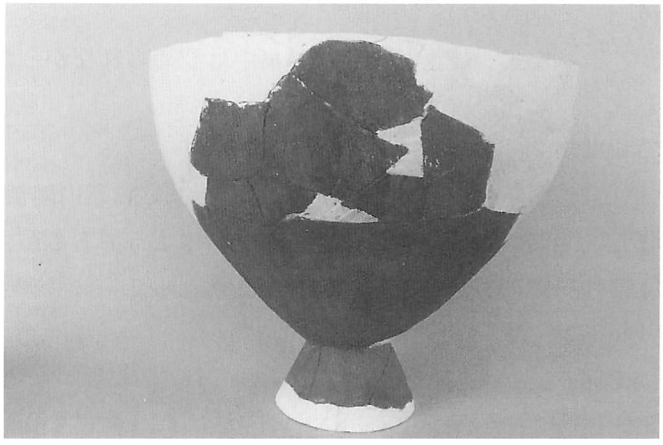
土した。胎土に雲母・石英粒子を含む。表面は縦方向、内面は横方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。7　器種は台付甕の脚部。住居中央部で5・6と並び出土した。胎土に雲母・石英粒子を多く含む。表面は縦方向、内面は横方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。8　器種は蓋。住居中央部で5・6と並び出土した。胎土に雲母・石英粒子を含む。表面は縦方向、内面は横方向のヘラ状工具による成形が観察できる。9　器種は壷。住居中央部で完形品が2つに割れたように出土した。器高10.7cm（口縁2.6cm）、口縁径10.7cm。胴部は球体に近く、口縁部は直線的である。胎土に白色粒子を含む。外面底部付近にすすが付着している。外面と内面口縁部はともに縦方向のハケの調整後ミガキによる成形が施され、胴部内面の下半部には横方向のハケよる成形が、胴部内面の口縁部付近は輪積痕跡が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。10　器種は台付甕。住居中央部で出土した。胎土に雲母・長石を含む。表面は縦方向のハケ、内面はナデによる成形が観察できる。胴部にタール状の付着物が観察できる。11　器種は坩。住居中央部で完形品が口縁と胴部で2つに割れたように出土した。器高21.5cm（口縁11.4cm）、口縁径12.3cm。胴部は下半部で最大径（口縁14cm）をもつ。口縁部は直線的である。胎土は2に類似しきめ細かく、雲母・白色粒子を含む。外面胴部付近にすすが付着している。外面と内面口縁部はともに縦方向のミガキが、胴部外面のにはナデが観察される。



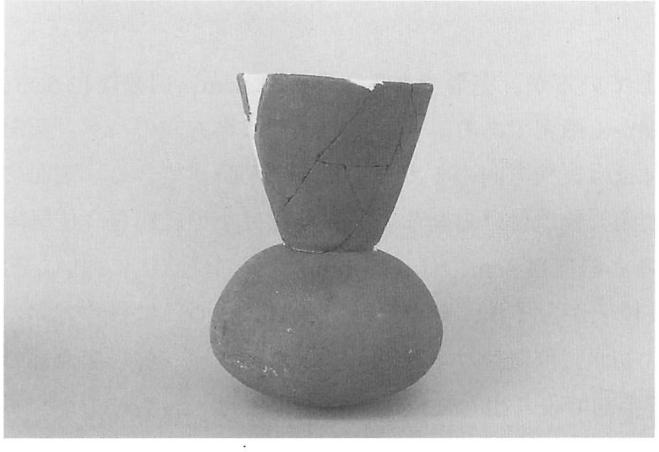
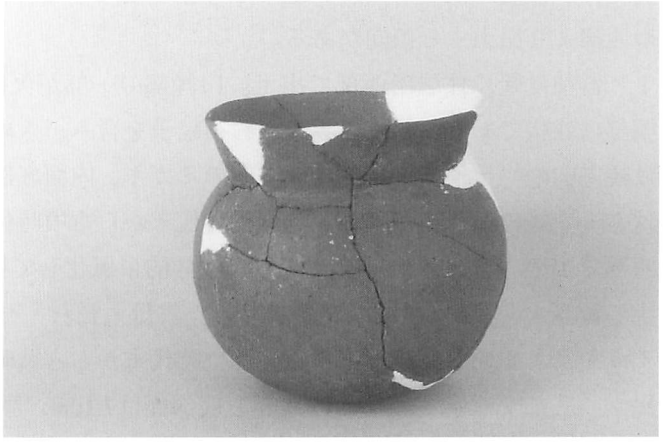
1号住居跡　出土遺物実測図

1号住居跡（床面）

1号住居跡（掘り上り状況）



1号住居跡　遺物出土状況

1号住居跡　出土遺物

第2号住居跡

位置

C－17・18　B－18

検出状況

第2次調査で確認された住居跡である。遺構確認のため包含層を掘り下げ中に、第2次調査区北西隅に土器の集中出土が認められ、調査区壁面でも遺構壁の立上がりが認められた。精査を行なったところ、地表下150cmのところで平面プランと4号溝との重複も確認された。

この段階での両遺構の新旧関係は判断できず、両者にまたがるセクションベルトを設定し調査を進めた。結果、明確な壁立上がりや床面より10cm前後浮いて台付甕の破片などが出土し、これを2号住居跡とし認定した。但し、調査区壁や地下埋設物、重複した4号溝により2号住居跡の調査面積は狭いため、不明な点が多い。

主軸方向

調査面積が狭いため測定することはできない。

形態と規模

残存部分から楕円形と推測。長軸（7.47）m×短軸（4.45）m　面積（18.716）m^2

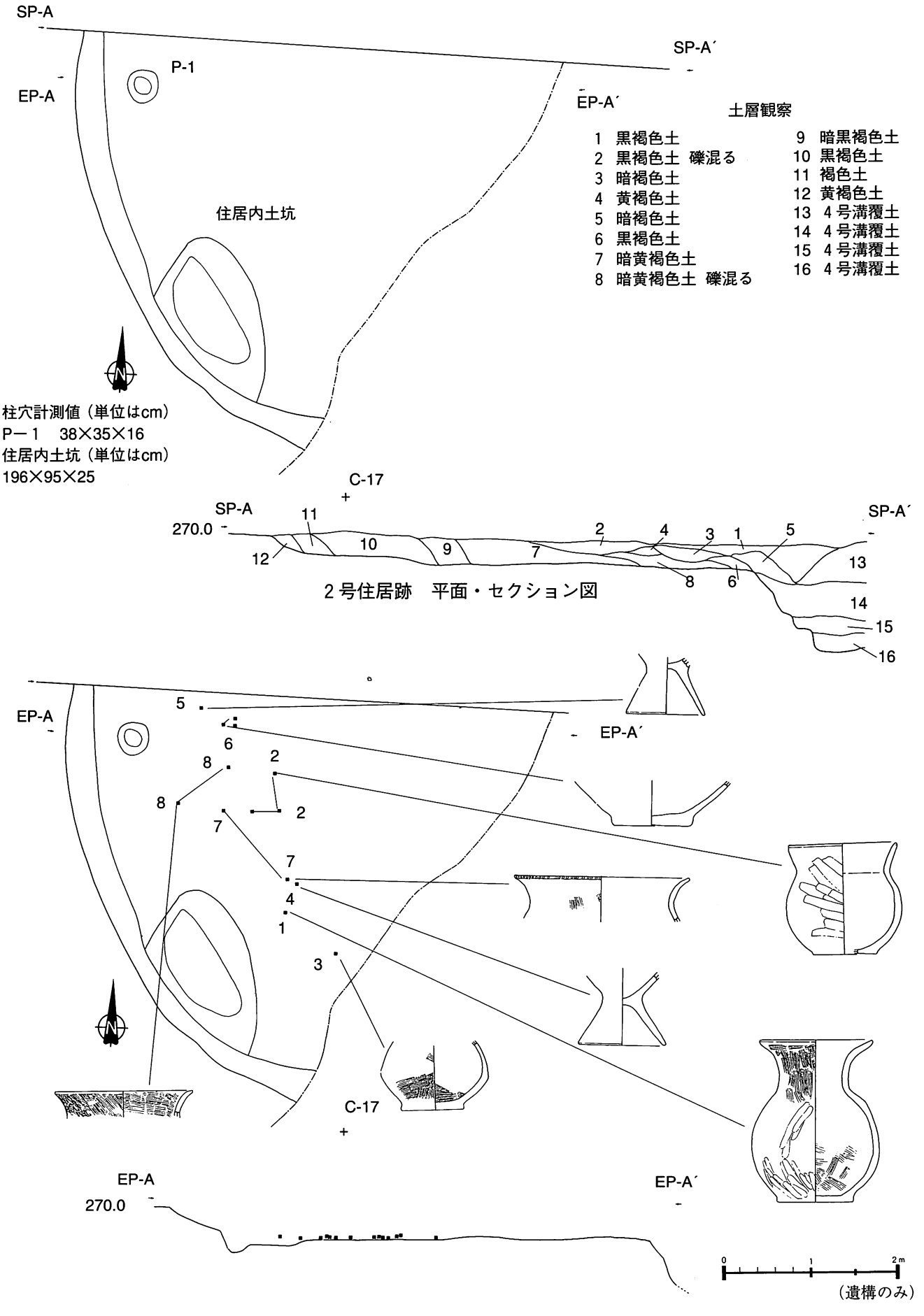
住居内施設

柱穴　　P1のみ確認された。

壁　　全体的に緩やかな立上がりである。

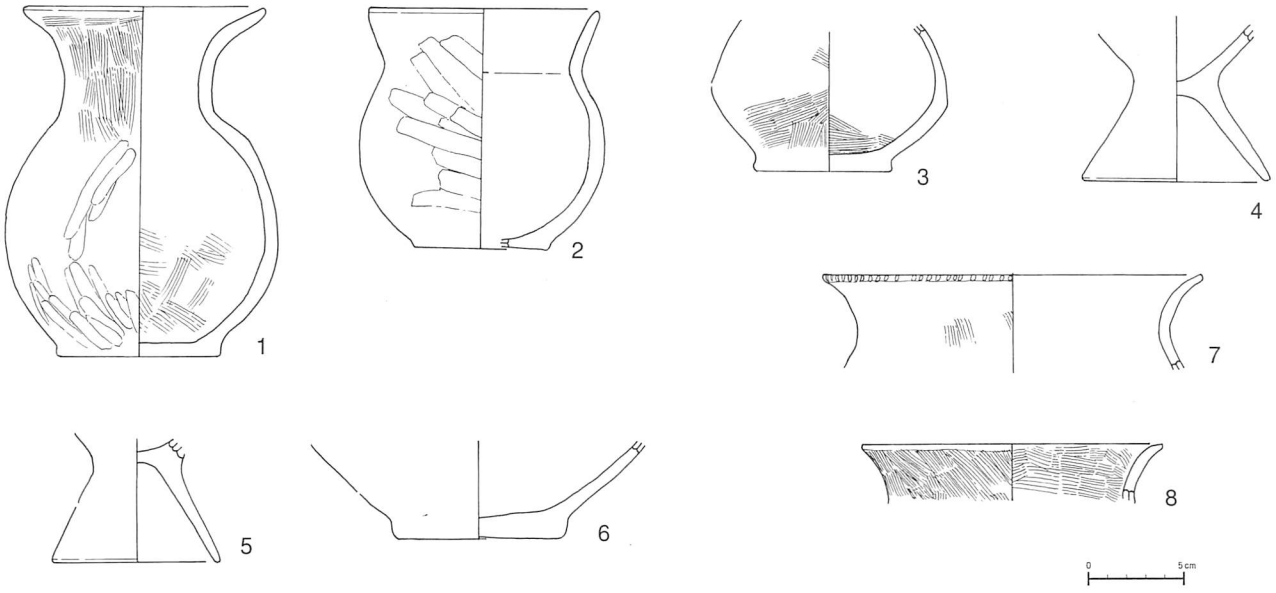
床　　貼り床、硬化面は確認されなかったが、床面の南側より拳大以下の礫が2.5m範囲で広がっているのが

確　　認された。
炉　　なし。焼土・炭化材の集中は認められなかった。
周溝　　なし。
重複関係
　2号住居跡の東側で4号溝と重複している。新旧関係については断面観察により4号溝が新しいと判断できる。また、北側で4号住居跡と重複しているようであるが、埋設物により明確に確認できなかった。出土遺物からは4号住居跡の方が若干新しいと考えられる。
使用回数
　1回。
出土遺物
　プラン確認段階から住居覆土の遺物出土量は多いが、破片が主体であった。完形品あるいは残存状況が良好な資料は、住居床面のレベルに近くなり集中している。出土状況については分布図のとおりで、床面より直上で、南西部より出土する傾向がある。
1　器種は壷。住居南西部で出土。口縁部の一部が欠損しているが、完形である。器高18.4cm、口縁径12.6cm、胴部は球状である。胎土に雲母・石英粒子を含み、きめ細かく緻密である。表面の口縁部は横方向のハケ、頚部は縦方向のハケ、胴下半部は縦方向のミガキ、内面底部付近は縦横方向のミガキよる成形が観察できる。表面にはタール状の付着物がみれる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。2　器種は小型広口壷。住居南西部で出土。2／3欠損している。全体的に風化している。器高11.4cm、(口縁3.1cm)、胴部は球状に近い。胎土に粒径1～2mm程度の礫が目立ち、雲母・長石・石英粒子が含まれ、やや粗雑である。表面には斜め方向のミガキによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。3　器種は壷。住居南西部で出土。底部から胴下半部のみ残存。底部径は7.1cm、胴下半部で張り出している。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、やや粗雑である。表内面には斜め方向のミガキによる成形が観察できる。表面の一部にはすすが付着、内面は全体的にすす状の付着物で黒色になっている。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。4　器種は台付甕の脚部。住居南西部で出土した。表面がやや摩滅しているため、成形の痕跡は確認できない。胎土に雲母・石英粒子が多量に含まれ、やや粗雑である。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。5　器種は台付甕の脚部。住居南西部で出土した。胎土に粒径1～2mm程度の礫が目立ち、雲母・長石・石英粒子が含まれ、やや粗雑である。表面はナデによる成形がされる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。6　器種は壷の底部。住居南西部で出土した。胎土に雲母・石英粒子を含む。表面は縦方向、内面は横方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。7　器種は壷の口縁部。住居南西部で出土した。胎土に雲母・石英粒子を含み、緻密である。口縁には刻み目、表面口縁部はナデ、頚部に縦方向のハケ、内面はナデ成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。8　器種は壷の口縁部。住居南西部で出土した。胎土に雲母を含む。表面は斜め方向、内面は横方向のミガキによる成形が観察できが、口縁の仕上げは雑である。底部は欠損している。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。

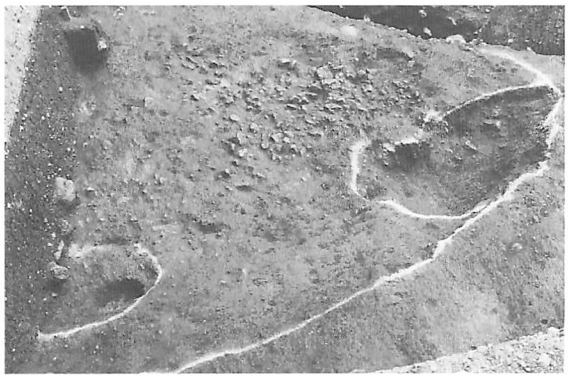


2号住居跡　平面・セクション図

2号住居跡　遺物出土平面・垂直分布図

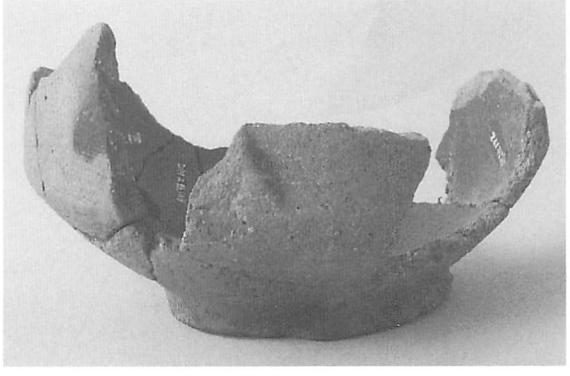


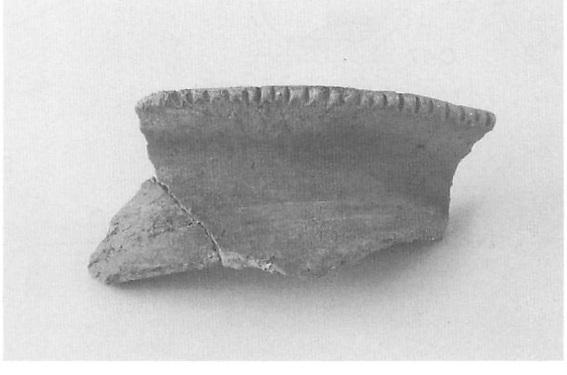
2 号住居跡　出土遺物実測図



2 号住居跡（(床面）

遺物出土状況





2 号住居跡　出土遺物

第３号住居跡

位置

Ｃ－16・17

検出状況

第２次調査で確認された住居跡である。先に検出され調査中であった５号溝の立上がり断面に、周溝らしい掘り込みを持つ遺構断面を確認した。精査を行なったところ、地表下150cmのところで円形のプランが検出され、住居跡と溝が重複する平面プランが確認された。

調査の結果、明確な壁立上がりや床面より15cm前後浮いて台付甕の破片などが出土し、部分的であるが周溝も確認できたため３号住居跡とした。遺物は少量の出土で、２号溝と調査壁の関係で、一部のみの調査となった。

主軸方向

調査面積が狭いため不明。

形態と規模

住居平面形態は調査面積が狭いため不明。　長軸（2.6）ｍ×短軸（1.5）ｍ　面積（3.206）m^2

住居内施設

柱穴　柱穴は１基のみ確認された。調査壁と５号溝との重複で一部分のみの調査であったので未調査部分に更に柱穴が存在する可能性がある。

壁　　調査壁と５号溝に重複している関係で部分的な壁の残存状況であるが、壁高は残存部分の計測で約30cmを計り、立上がりは直角に近い。

床　　やや硬化しているが貼り床は認められなかった。水平レベルで起伏のない床面である。

炉　　なし。ただし、一部分のみの調査であったので未調査部分に存在することも考えられる。

周溝　南北で一部確認されていおり、この周溝をもって住居範囲を推定した。

重複関係

住居跡の西側で２号溝と重複している。新旧関係については断面観察の結果、２号溝の方が新しい。

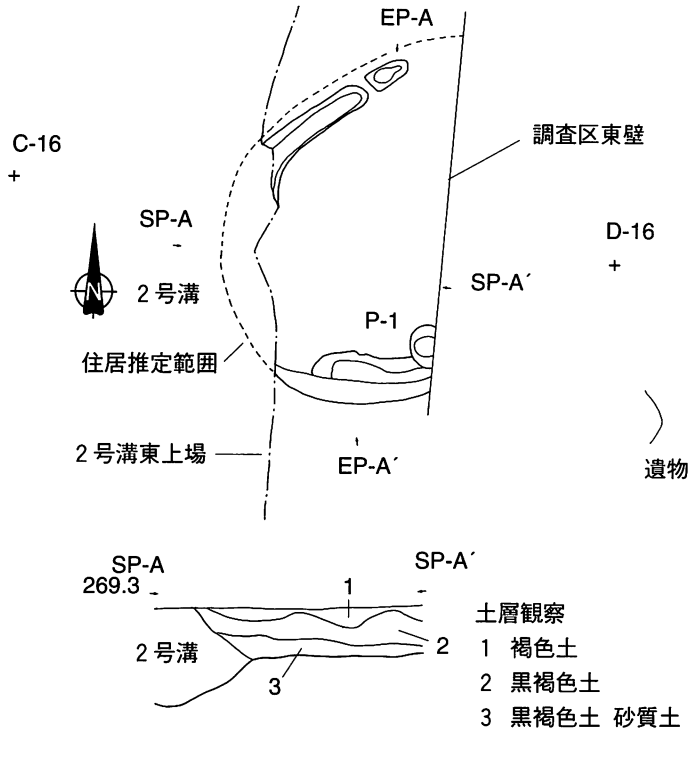
使用回数

１回

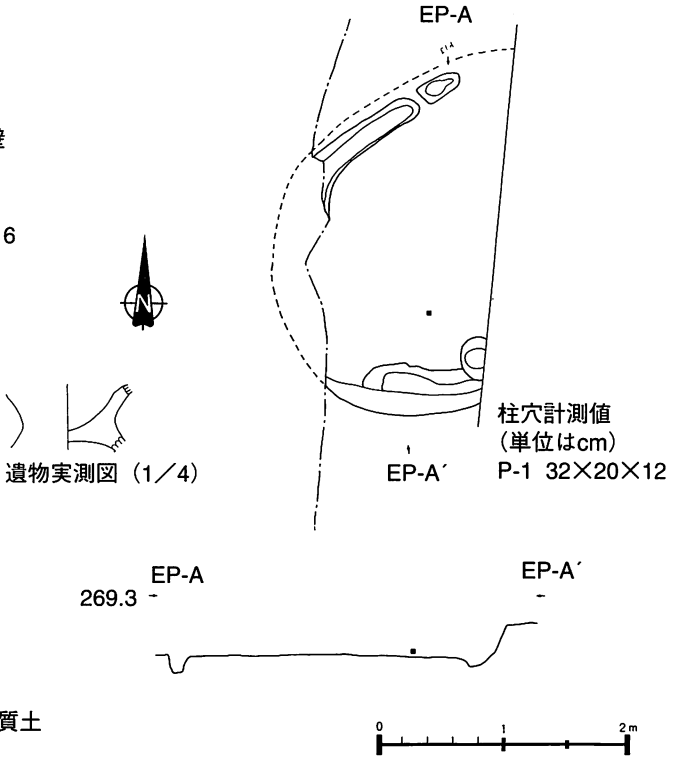
出土遺物

１点のみの出土である。器種は台付甕の脚部。住居南部で床面頂上からの出土。胎土は赤色粒子を含み、きめ細かいが、摩滅が激しい。

３号住居跡　完掘状況



3号住居跡　平面・セクション図



3号住居跡　遺物出土平面・垂直分布図

第4号住居跡

位置

C－12・13

検出状況

第2次調査で確認された住居跡である。4号溝周辺の遺構確認作業中調査区東側壁面付近の地表下140cmのところで検出され、調査区壁面に立上がり断面を確認した。

精査を行なったところ、隅丸方形プランが確認されセクションベルト設定後に掘り下げを開始した。当初は2号住居の継続部分と考えられたが重複する別住居跡と判明した。

遺物は覆土中から出土量は多く、壁も良好な残存であったことなどから4号住居跡と認定し調査した。

主軸方向

不明である。

形態と規模

隅丸方形　長軸（2.78）m×短軸（2.51）m　面積（5.62）m^2

住居内施設

柱穴　なし。

壁　　調査壁と5号溝に重複していため部分的残存状況であるが、約20cmを計り立上がりは直角に近い。

床　　若干硬化しているが、貼り床等は認められなかった。水平レベルで起伏のない床面である。

炉　　なし。ただし、一部分のみの調査であったため未調査部分に存在する可能性がある。

周溝

認められなかった。

重複関係

住居跡東壁で5号溝と重複している。新旧関係については明確にできなかった。

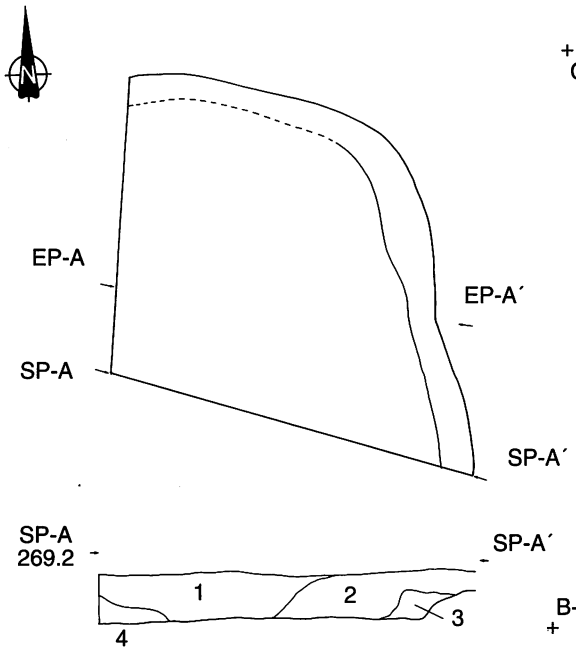
使用回数

1回。

出土遺物

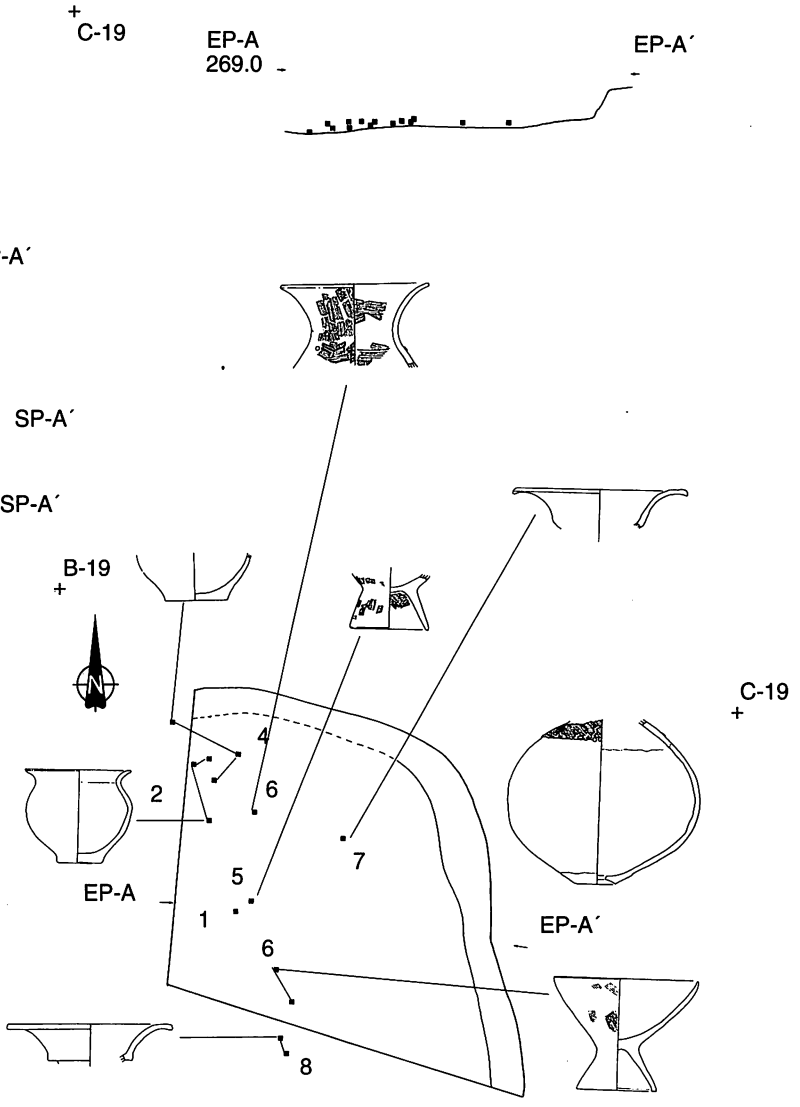
住居跡覆土からの遺物の出土量にあったが、下層にむかって出土量は増加した。主な遺物は、古墳時代初頭を中心に、弥生時代末の土器片も含む破片が主体であった。完形品あるいは残存状況が良好な資料は、住居床面の直上で集中している。出土状況については分布図のとおりであるが、壷などの接合資料は土器片が散在した状況で出土し、大型の土器破片は口縁部が多く出土している。完形で出土したのは高坏1点のみである。

1　器種は壷。住居北東部で出土した。口縁から肩部にかけてと胴部の一部が欠損。胎土に雲母・長石・石英粒子が含まれ、やや粗雑である。肩部には縄文が施文され、表内面にはナデによる成形が観察できる。縄文とナデの境目には微細な刺突文が横方向に1列施されている。また、径0.5cmの円形貼付文が2点1組で存在し、肩部に3組がある。その間隔は不規則である。底部には、径2cmの穿孔がなされている。胴部中央よりやや下で最大径をもち、その周辺にすす状の付着物がみられる。古墳時代初頭に位置付けられる。2　器種は小型広口甕。住居内で土器片が散在して出土。口縁部と胴下半部の一部が欠損しているが、完形である。器高10.5cm、口縁径12.8cm、胴上半部が広がり、最大径10.0cmとなる。底部に高台が付く。胎土に雲母・石英粒子を含み、きめ細かく緻密である。表内面の全体はナデにより成形されているが、内面の成形はやや雑である。付着物などはない。古墳時代初頭に位置付けられる。3　器種は高坏。住居中央部で出土。口縁の一部が欠損し、大型の破片に破損しているが、完形で傾いた姿勢で出土。器高12.6cm、口縁径17.0cm。胎土に雲母・石英粒子を多量に含まれ、やや粗雑である。部分的に若干摩滅しているが、表内面はナデによる成形がされている。表面の脚部はハケとヘラ状工具による成形が観察でき、ハケの削りだし痕跡も残る。坏部は直線的であるが、口縁部でやや内曲する。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。4　器種は壷の底部である。住居内で土器片が散在して全体的に風化している。胎土に粒径1～2㎜程度の礫が目立ち、雲母・長石・石英粒子が多量に含まれ、やや粗雑である。表内面にはナデによる成形が観察できる。底部付近にすす状の付着物がある。色調は古墳時代初頭に位置付けられる。5　器種は台付き甕の脚部。住居北東部で出土した。胎土に雲母・長石と、特に石英粒子を多く含み、やや粗雑である。表面は縦方向のはけ、内面はナデによる成形が観察できる。表面の脚部はハケとヘラ状工具による成形が観察でき、ハケの削りだし痕跡も残る。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。6　器種は壷。住居北東部で出土した。口縁部から肩部のみ残存。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、密である。表面口縁部から頚部は縦方向のハケとナデ、肩部は横方向のハケ、内面口縁部は斜め方向のハケとナデ肩部は横方向のハケによる成形が観察できる。肩部には径0.5cmの円形貼付文が2個存在し、その間隔は4.3cmを測る。内面の一部にはタール状の付着物が確認できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。7　器種は壷の口縁部。住居北東部で出土した。胎土に雲母・長石と、特に石英粒子を多く含み、やや粗雑である。単純口縁で外反が急である。やや摩滅しているが、表内面ともナデによる成形がされている。8　器種は有段口縁壷の口縁部。住居北東部で出土した。胎土に雲母・長石と、特に石英粒子を多く含み、やや粗雑である。単純口縁で外反が急で、肩部で有段をもつ。やや摩滅しているが、表内面ともナデによる成形がされている。内面には僅かにすすが付着している。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。

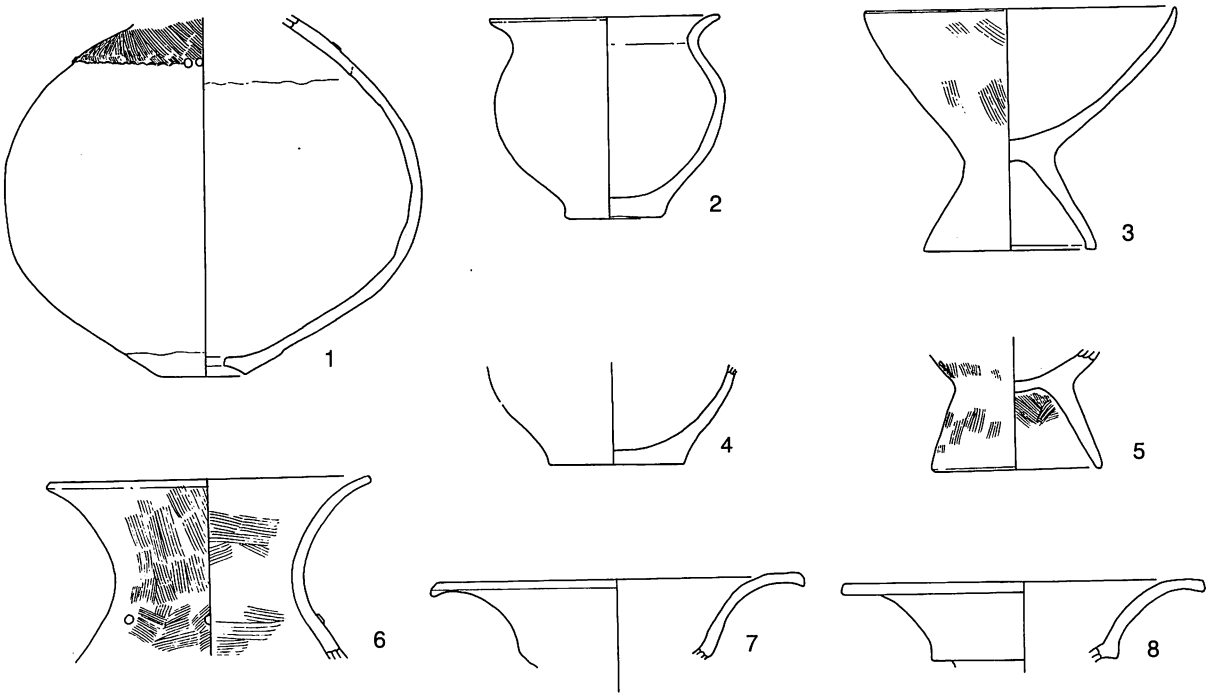


土層観察
1 黄褐色土　礫が混る
2 黒褐色土
3 黒褐色土　礫が混る
4 黄褐色土

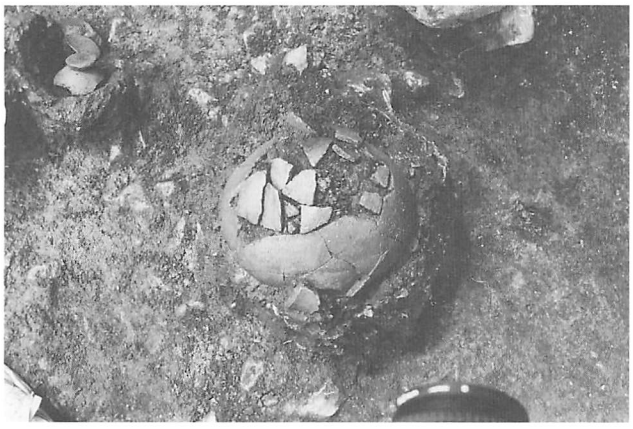
4号住居跡　平面・セクション図



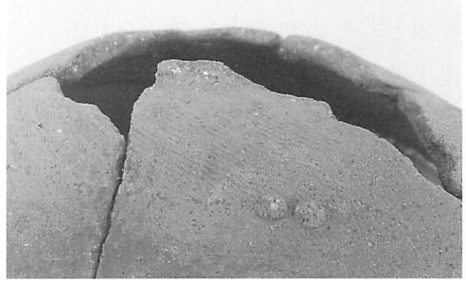
4号住居跡　遺物出土平面・垂直分布図



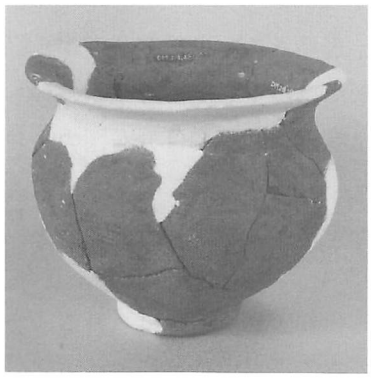
4号住居跡　出土遺物実測図

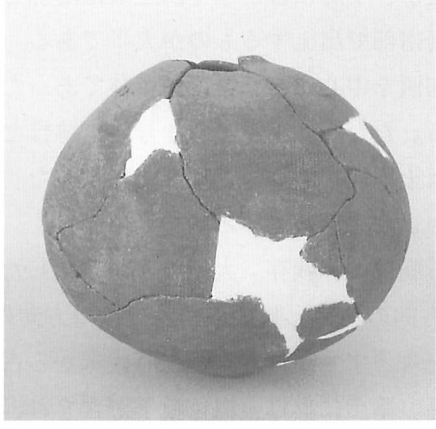


4号住居跡　遺物出土状況



（頸部文様帯）





4号住居跡　出土遺物

（底部）

第5号住居跡

位置

　B・C－12・13

検出状況

　第2次調査で確認された住居跡である。包含層を掘り下げ遺構確認作業中の地表下150cmのところで焼土・カーボン粒子の混ざるプランが検出された。精査の結果、プランの東側では調査区東壁にあたり確認できなかったが隅丸方形を呈するプランと南側に重複する隅丸方形のプランが確認でき、調査区東壁断面に壁立上がりを確認した。この段階で住居跡であると判断し、東西・南北のセクションベルトを設定し補助的な試掘坑を設けた。調査結果、遺物の出土と壁立上がり、貼床の確認から住居跡と確定し、住居跡としては重複または拡張の可能性をとらえた。

主軸方向

　N－15°－W

形態と規模

　隅丸方形　長軸7.10m×短軸6.32m　　面積（33.71）m^2

住居内施設

柱穴　P1・P2・P9・P12・P15が主柱穴である。P3P10P16は主柱穴に付随してみられるは支柱穴と見られ

る。

壁　東側住居壁は調査区域になり、南側住居壁は6号溝と重複しており存在しないが、平均して30cmの壁高が残り、立ち上がりはほぼ垂直に立ち上がっている。

床　貼り床等はない。水平レベルで起伏のない床面である。

炉　なし。

周溝　なし。

重複関係

住居跡の南側で6号溝と重複している。新旧関係については6号溝が新しい。

使用回数

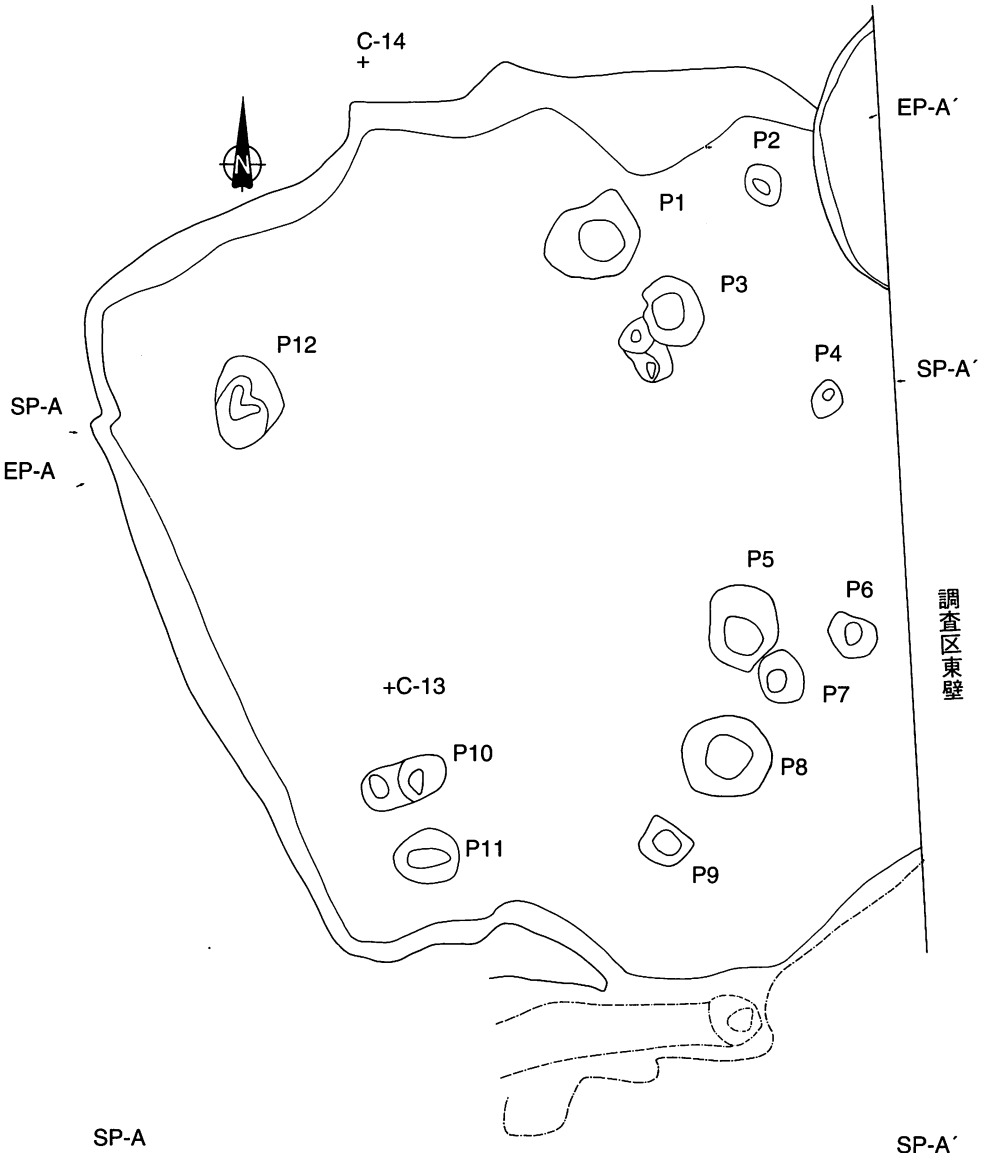
住居跡の形態から2軒の重複が考えられたが、覆土の堆積状況や床面のレベル、柱穴の配置などから重複より拡張とした方が妥当と考えられる。

出土遺物

住居跡覆土からの遺物の出土量はあったが、下層にむかって出土量は増加した。垂直分布では、床面と覆土上部で集中する傾向がある。位置的には住居南部で出土するものが大半である

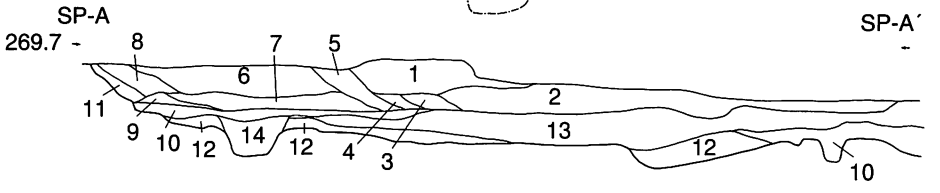
主な遺物は、弥生時代末から古墳時代初頭を中心に、土器片が主体であった。完形品あるいは残存状況が良好な資料は、住居床面の直上で集中している。ただし、1・2・4号住居跡ほど完形品は出土しておらず、破損した大型破片が目立つ。壷などの接合資料は土器片が散在した状況で出土した。出土状況については分布図のとおりである。また、北東隅より銅鏃が覆土中より出土している。

1　器種は壷。住居南部で出土。肩部から胴部のみ残存。大型破片が破損した状態で出土。胎土に雲母・石英粒子を含み、緻密である。表面頚部は斜め方向のハケ、胴部にかけては横方向のミガキ、内面は横方向のミガキ、による成形が観察できる。表面全にはタール、すすが付着。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。2　器種は壷。住居南部で出土。胴部のみ残存。胎土に雲母・白色粒子が含まれ、密である。表面は横、斜め方向のハケ、内面は横方向のハケによる成形がされている。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。3　器種は小甕。住居南部で出土。口縁の一部が欠損し大型破片化しているが完形である。器高13.1m、口縁径9.6cm、胴下半部が広がり、最大径11.4cmとなる。胎土に雲母・石英粒子を含み、きめ細かく緻密である。表面口縁部は斜め方向のミガキ、頚部から下は横方向のミガキ、内面口縁はハケとミガキ、胴部付近はナデのよる成形が観察できる。また、内面胴部には輪積み痕がある。付着物などはない。弥生時代末～古墳時代初頭に位置付けられる。4　器種は壷。住居南部で出土。口縁から肩部のみ残存。胎土に雲母・長石・石英粒子を含み、やや粗雑である。口縁は単純口縁で緩やかに外反する。表面口縁は斜め方向のミガキ、胴部にかけてはナデ、内面口縁部は横方向のハケ、胴部にかけては横方向のミガキによる成形が観察できる。表面頚部と内面全体にはタールが付着。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。5　器種は壷。住居南部で出土。口縁から頚部にかけての破片。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、密である。口縁には刻み目が施文され、大きく外反する。表面は口縁はナデ、頚部は斜め方向のハケ、内面はナデによる成形がされている。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。6　器種は壷。住居南部で出土。口縁のみ残存。胎土に雲母と径2mm程度の白色粒子が含まれ、やや密である。表面は斜め方向のハケ、内面は横方向のハケとミガキによる成形がされている。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。7　器種は壷。住居南部で出土。口縁から肩部のみ残存。胎土に雲母・白色粒子を多く含み、やや密である。表面口縁はナデ、肩部にかけてはミガキ、内面は横方向のミガキによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。8　器種は壷。住居南部で出土。口縁のみ残存。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、密である。口縁単純口縁である。表面は口縁は斜め、横方向のハケとナデによる成形がされている。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。9　器種は台付甕の脚部である。住居南部で出土。胎土に雲母・長石・石英粒子が含まれ、密である。表面には縦方向のハケ、内面は横方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末～古墳時代初頭に位置付けられる。10　器種は台付甕の脚部である。住居北部で出土。胎土に粒径1

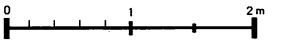


柱穴計測値（単位はcm）

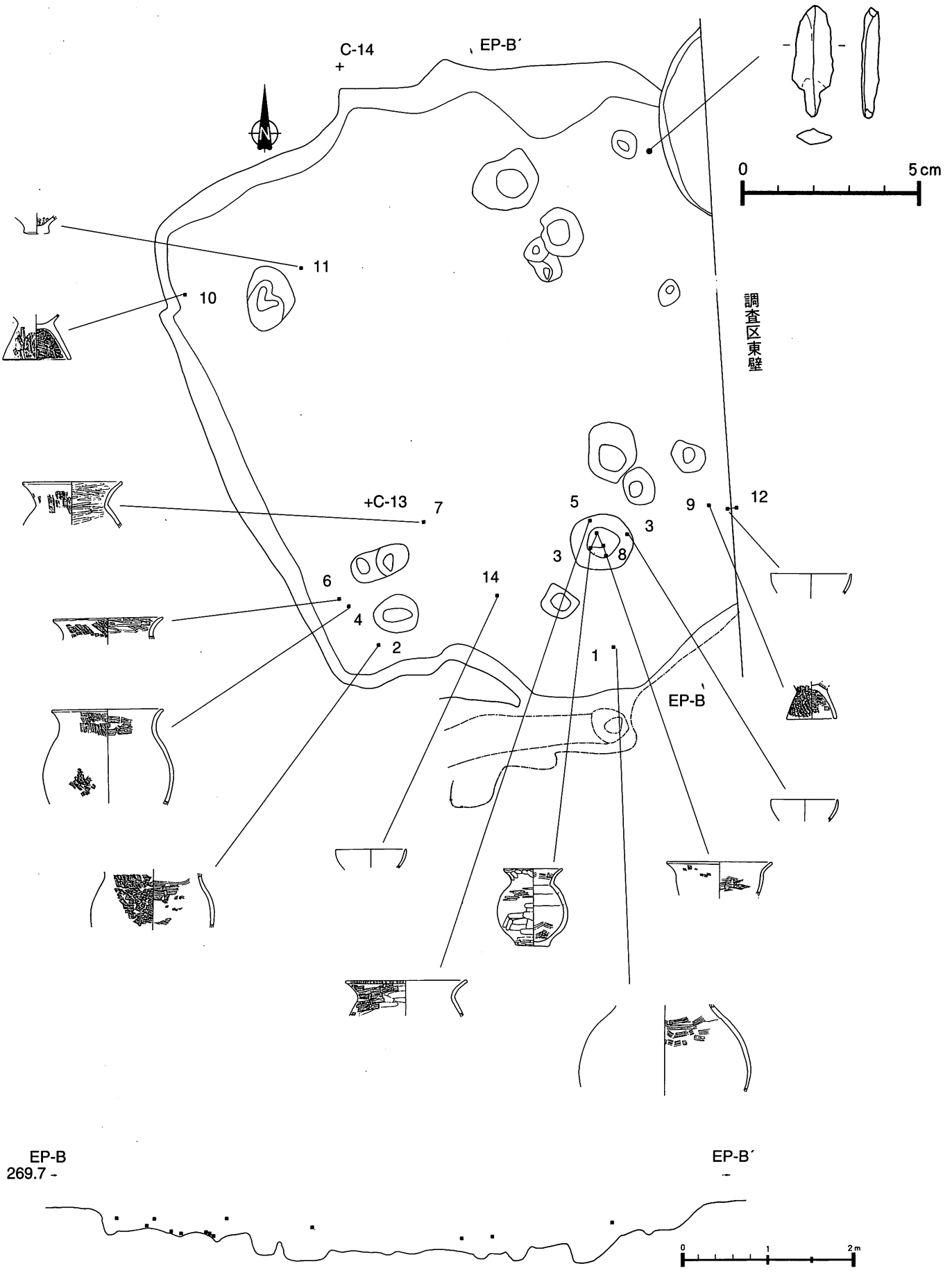
P－1	75×59×23
P－2	42×30×18
P－3	58×38×24
P－4	32×25×18
P－5	68×55×19
P－6	40×31×15
P－7	44×30×24
P－8	72×63×16
P－9	45×45×13
P－10	55×44×15
P－11	40×34×21
P－12	64×55×22



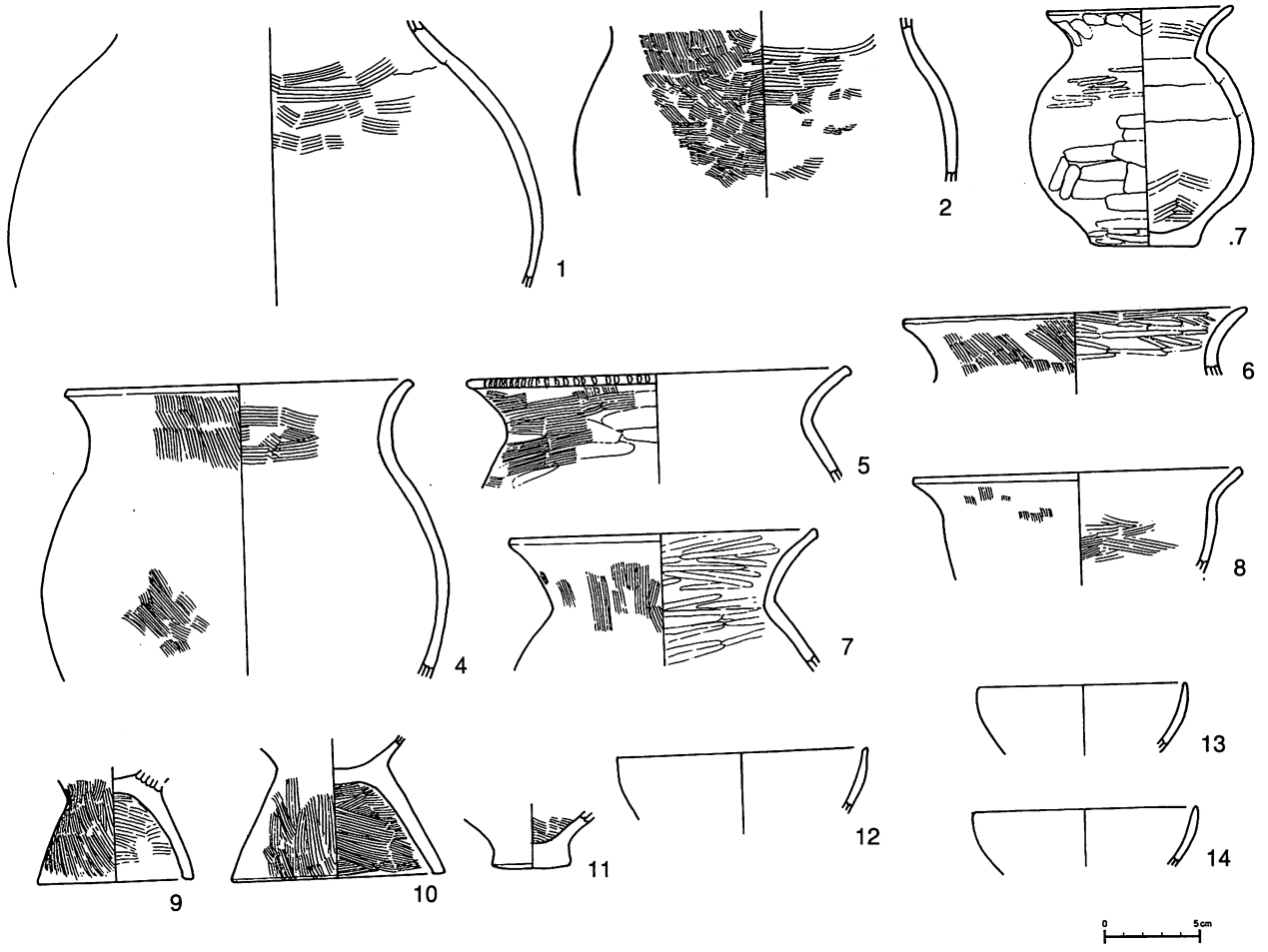
1 褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 明黄褐色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 褐色土
9 暗褐色土
10 褐色土
11 明褐色土
12 黄褐色土　砂質土
13 褐色土
14 黄褐色土



5号住居跡　平面・セクション・エレベーション図



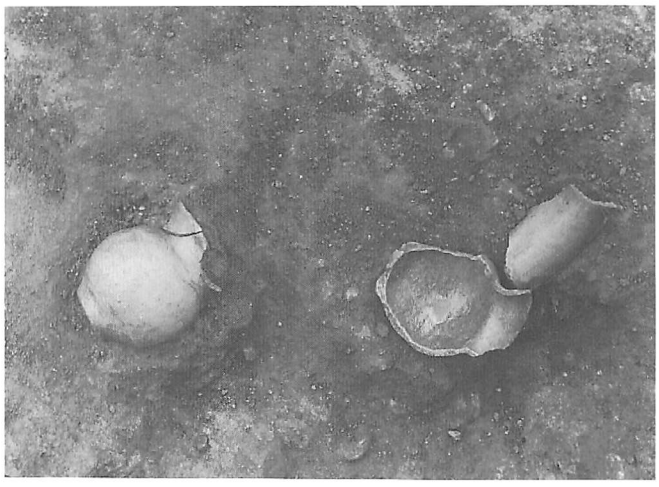
5号住居跡　遺物出土平面・垂直分布図



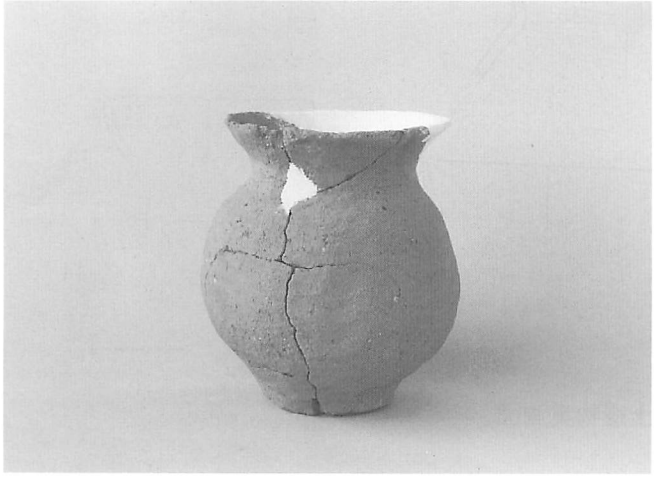
5号住居跡　出土遺物実測図

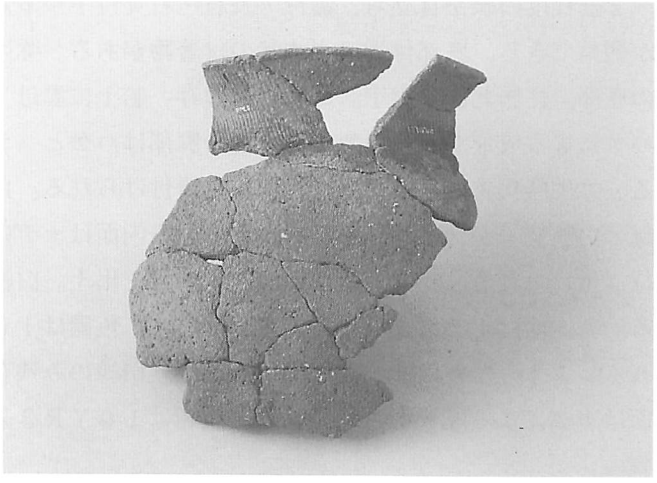
～２㎜程度の礫が目立ち、雲母・長石・石英粒子が多量に含まれ、やや粗雑である。表内面にはナデによる成形が観察できる。底部付近にすす状の付着物がある。弥生時代末～古墳時代初頭に位置付けられる。11　器種は甕の底部。住居北部で出土。底部のみ残存。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、やや密である。表面はナデ、内面はハケによる成形がされている。表面の脚部はハケとヘラ状工具による成形が観察でき、ハケの削りだし痕跡も残る。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。12　器種は壷。住居南部で出土。口縁のみ残存。胎土に雲母・白色粒子が含まれ、やや粗である。表内面はナデによる成形がされている。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。13　器種は壷。住居南部で出土。口縁のみ残存。胎土に雲母と白色粒子が含まれ、やや密である。表内面はナデによる成形がされている。色調は１０ＹＲ３／２。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。１４　器種は壷。住居南部で出土。口縁のみ残存。胎土に雲母と白色粒子が含まれ、やや密である。表内面はナデによる成形がされている。色調は１０ＹＲ３／２。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。

5 号住居跡　完掘状況（床面）



5 号住居跡　遺物出土状況





5 号住居跡　出土遺物

第６号住居跡

位置

Ｂ－12・13　Ｃ－12・13

検出状況

第２次調査で確認された住居跡である。１号住居跡周辺を精査中にプランが確認された。、地表下160cmである。ほかの住居跡と比較して、遺物の出土が少量であったため、２本のベルトを設置し、調査を実施した。

残存状況は悪く、南東壁面は消滅していたが、床面が確認されたことで住居跡と認定した。

主軸方向

Ｎ－58°－Ｗ

形態と規模

方形　長軸4.51ｍ×短軸（2.83）ｍ　面積（11.37）m^2

住居内施設

柱穴　なし。

壁　　壁高は部分的な残存状況で、約１５cmを測る。立上がりは緩やかである。

床　　貼床などは認めらず、床面は凹凸のある床面である。

炉　　住居中央部に焼土が集中しており、これを炉とした。

周溝　なし。

重複関係

土坑が２基認められたが、重複しているものなのか住居に付属しているものなのかは不明である。

使用回数

１回。

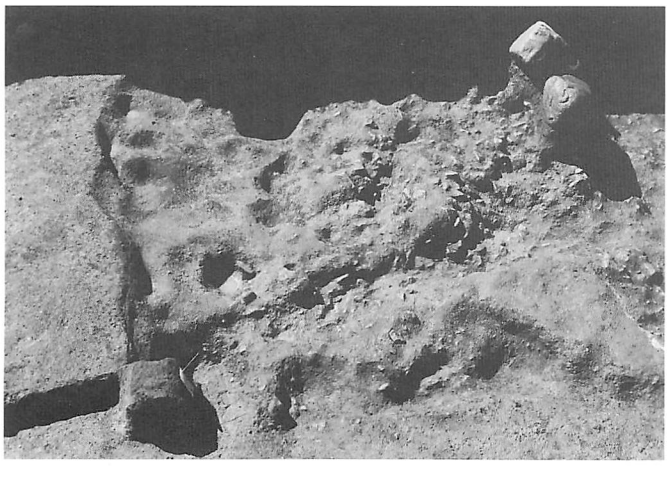
出土遺物

残存状況の悪い住居であるため、遺物の出土量も少ない。出土状況としては土器片が、住居内より散在して床面より若干高いレベルで出土している。

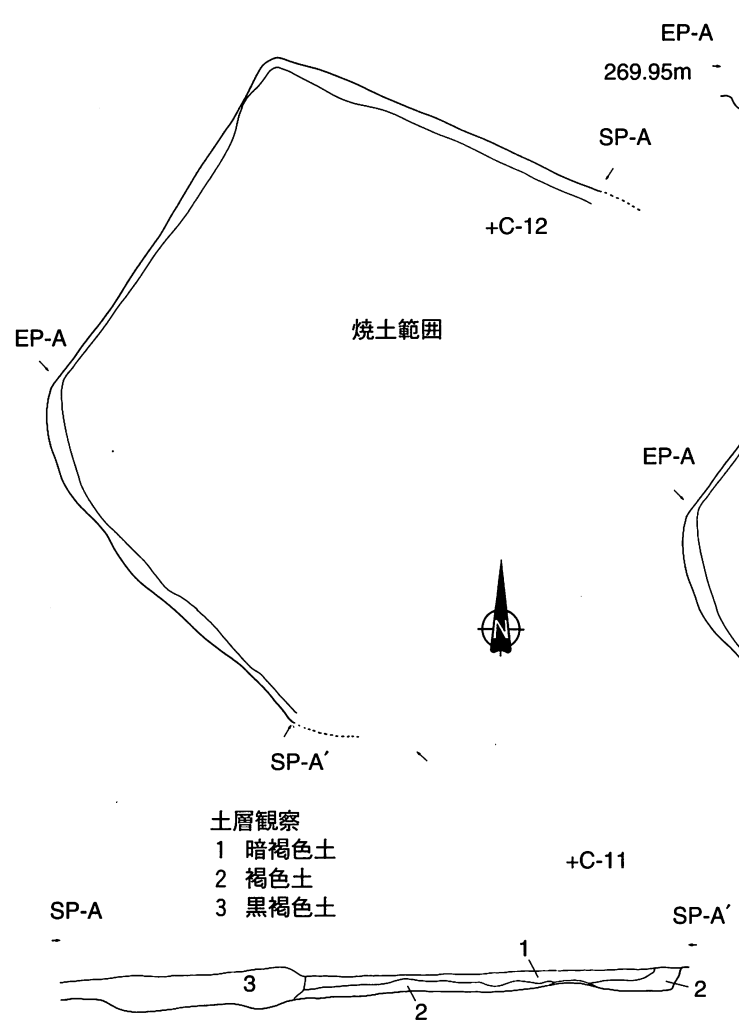
１　器種は碗。住居北側から出土。底部のみ残存。胎土に白色粒子が含まれ、やや粗雑である。表面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケによる成形が観察できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。

２　器種は甕。住居北側から出土。胴部のみ残存。大型土器片が破損して出土した状況である。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、密度は密である。表面は横方向のミガキ、内面横と斜め方向ハケによる成形が観察できる。表面にはすす状の付着物が確認できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。

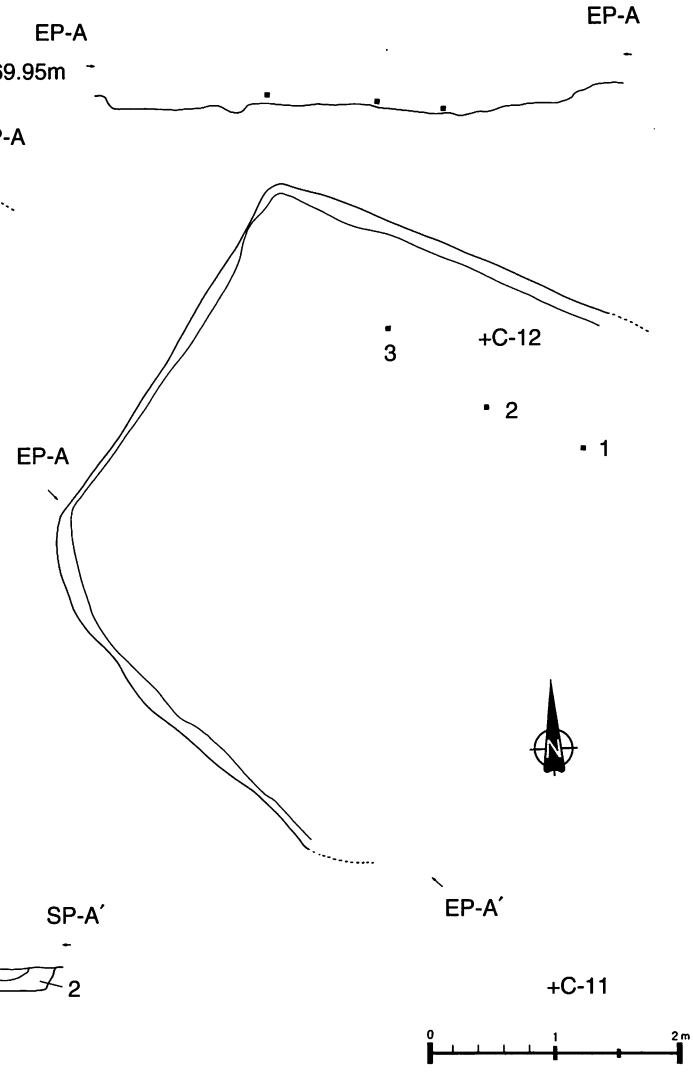
３　器種は甕。住居北側から出土。胴部のみ残存。大型土器片が破損して出土した状況である。胎土に雲母・石英粒子が含まれ、密度は緻密である。内面縦と斜め方向のハケとナデによる成形が観察できる。表面にはすす状の付着物が確認できる。弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる。



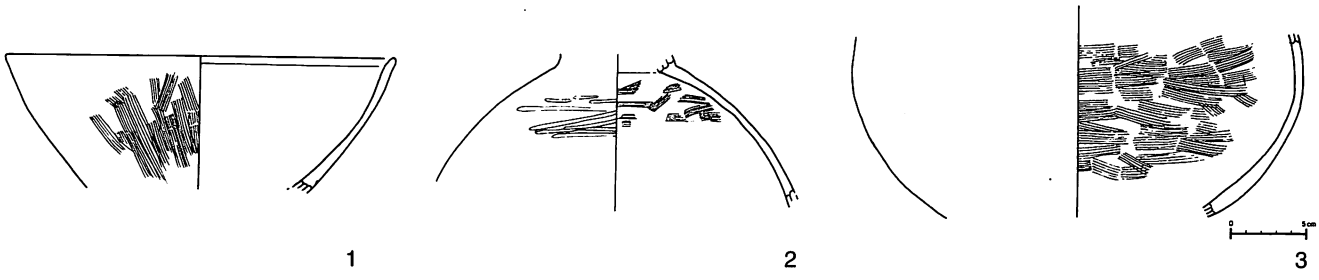
６号住居跡　完掘状況



6 号住居跡　平面セクション図



6 号住居跡　遺物出土平面・垂直分布図



6 号住居跡　出土遺物　実測図

7号住居跡

位置

B－14・15グリッド

検出状況

第2次調査で確認された住居跡である。5号溝を精査中にプランが確認された。住居跡北側で5号溝と重複し、西側は調査区域外となるため、南部のみが調査対象となり、南北のベルトを設置し、調査を実施した。ほかの住居跡と比較して、遺物の出土はほとんどないが、柱穴及び貼床が検出されたため、住居跡とした。

主軸方向

一部分の調査であったため不明。

形態と規模

方形と推測　長軸（2.9）m×短軸（3.4）m　面積（9.32）m^2

住居内施設

柱穴　5基確認されている。

壁　　一部しか残存していないが、平均10～15cmの壁高である。

床　　貼り床が確認された。

炉　　なし。ただし、中央部の床面から2～3cmの炭化材が多量に検出されている。状況は1ヶ所に集中しているというものではなく、中心部に散在している様相である。

周溝　なし。

重複関係

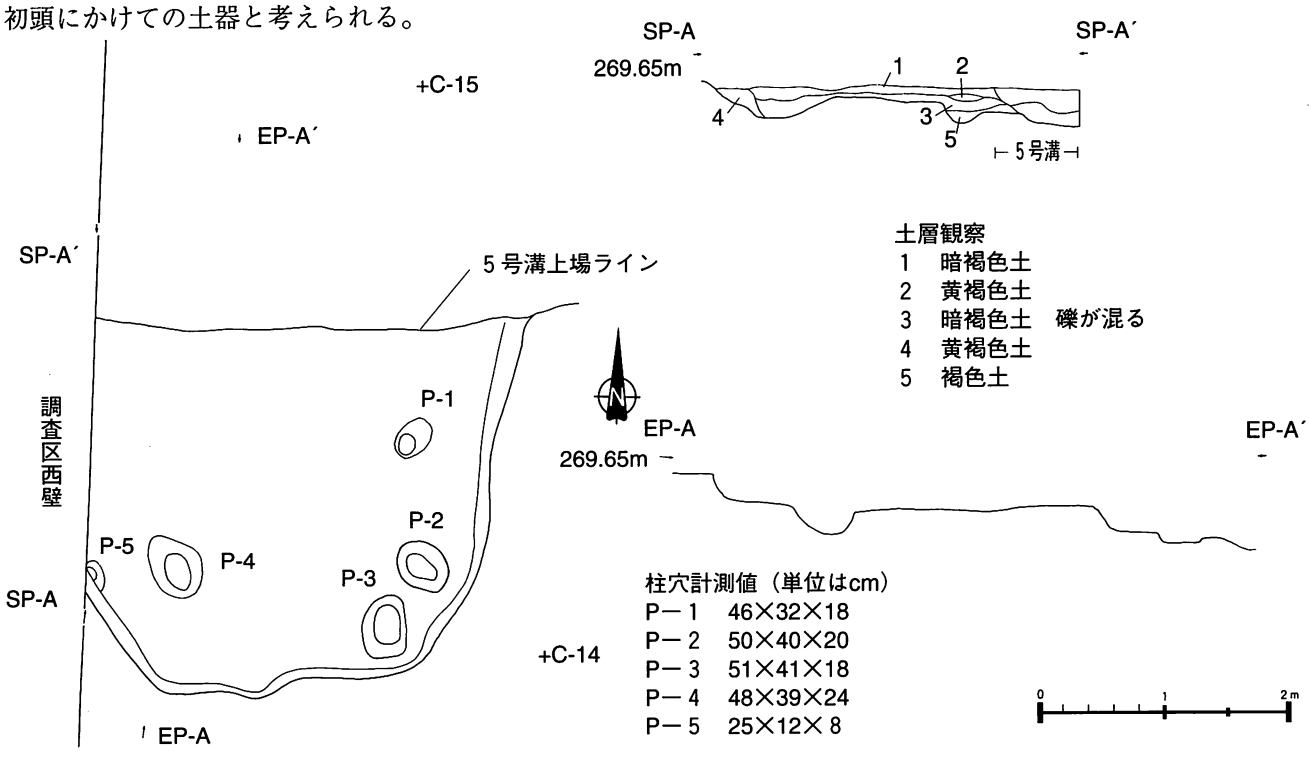
5号溝と北側で重複している。新旧関係は土層断面で判断できず不明。

使用回数

1回

出土遺物

小型の土器片が4点出土したのみである。小片であるため器種などは不明であるが、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器と考えられる。



7号住居跡　平面・セクション・エレベーション図

8号住居跡

位置

Ｂ－13・14グリッド

検出状況

第２次調査で確認された住居跡である。Ｂ－13・14グリッド周辺を精査中にプランが確認された。しかし、調査区西面との関係で住居跡東壁のみしか調査できなかった。

したがって、遺物の出土はほとんどないが、壁面の立上がりの状況から住居跡とした。

主軸方向

一部分の調査であったため不明

形態と規模

方形と推測　長軸4.85m×短軸（9.2）m　面積（3.17）㎡

住居内施設

柱穴　柱穴らしいきが１基確認されている。

壁　　一部しか残存していないが、平均30cmの壁高で、緩やかな立上がりである。

床　　やや硬化しており、水平である。

炉　　本調査範囲では確認されていない。

周溝　本調査範囲では確認されていない。

重複関係

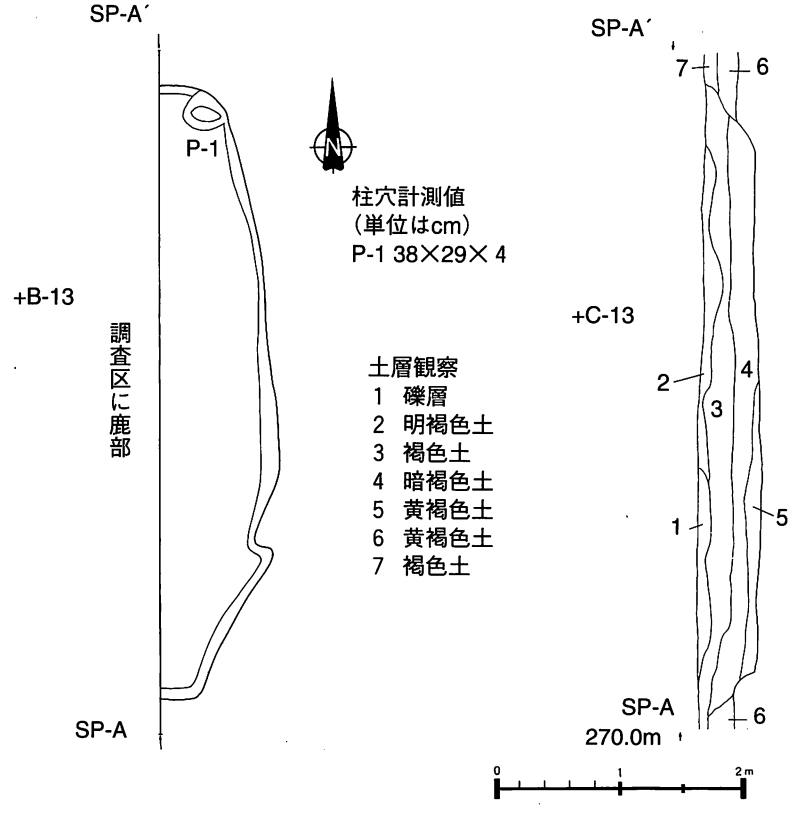
本調査では不明。

使用回数

本調査では不明。

出土遺物

小型の土器片が11点出土したのみである。小片であるため器種などは不明であるが、弥生時代末から時代古墳時代初頭にかけて土器と考えられる。



8号住居跡　平面・セクション図

9号住居跡

位置

Ｂ・Ｃ－20グリッド

検出状況

第２次調査で確認された住居跡である。今回の調査ではもっとも北の位置で検出された。調査対象地の用水路などの障害により該当地周辺は部分的な調査しかできなかった。

重機により表土掘削後、人力で包含層まで掘削した。精査の結果、調査区北東隅で炭化材が多く混入するプランを確認した。撹乱や調査範囲が限られた面積であるため遺物などの出土量は少ないが、覆土の混入物や床面の状況から住居跡とした。

主軸方向

本調査範囲では不明。

形態と規模

円形または楕円形と推測　長軸（2.9）ｍ×短軸（1.96）ｍ　面積（3.3）m^2

住居内施設

柱穴　本調査範囲では確認されていない。

壁　　残存部分で、平均60cmの壁高で、ほぼ垂直な立上がりである。

床　　やや硬化しており、水平である。

炉　　本調査範囲では確認されていない。

周溝　本調査範囲では確認されていない。

重複関係

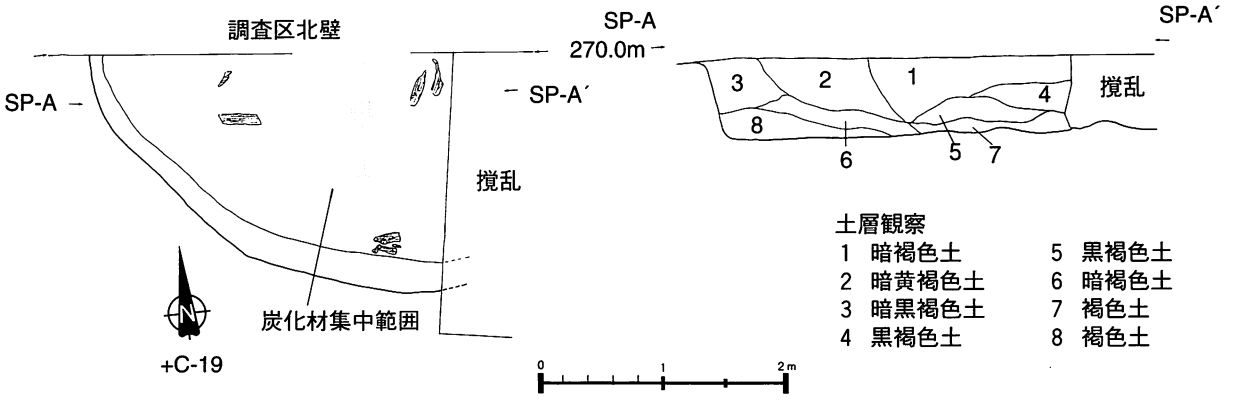
本調査では不明。

使用回数

本調査では不明。

出土遺物

小型の土器片が11点出土したのみである。小片であるため器種などは不明であるが、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器と考えられる。



9号住居跡　平面・セクション図

10号住居跡

位置

Ｂ－17・18グリッド

検出状況

第２次調査で確認された住居跡である。Ｂ－17・18グリッド周辺を精査中にプランが確認された。しかし、調査区西面との関係で住居跡東壁のみしか調査できなかった。

したがって、遺物の出土はほとんどないが、壁面の立上がりの状況から住居跡とした。

主軸方向

本調査範囲では不明。

形態と規模

方形と推測　長軸（3.19）m×短軸（0.64）m　面積（1.2）m^2

住居内施設

柱穴　本調査範囲では確認されていない。

壁　　残存部分で、平均15cmの壁高で、緩やかな立上がりである。

床　　やや硬化しており、水平である。

炉　　本調査範囲では確認されていない。

周溝　本調査範囲では確認されていない。

重複関係

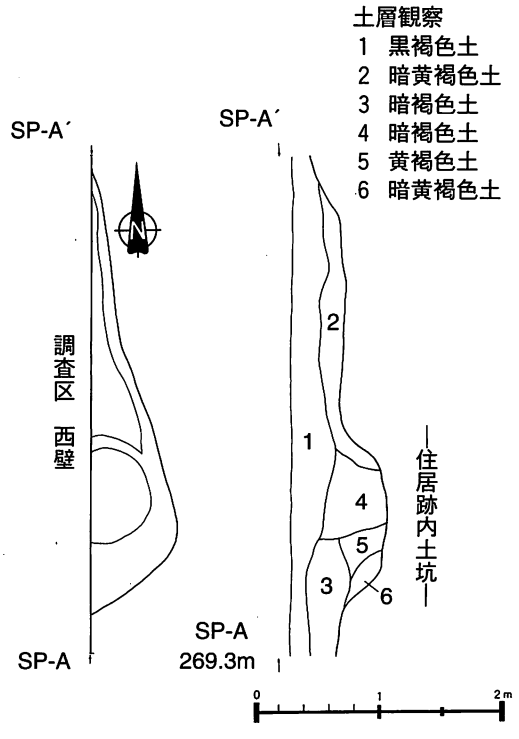
土坑と重複。住居内施設と考えられる。

使用回数

本調査では不明。

出土遺物

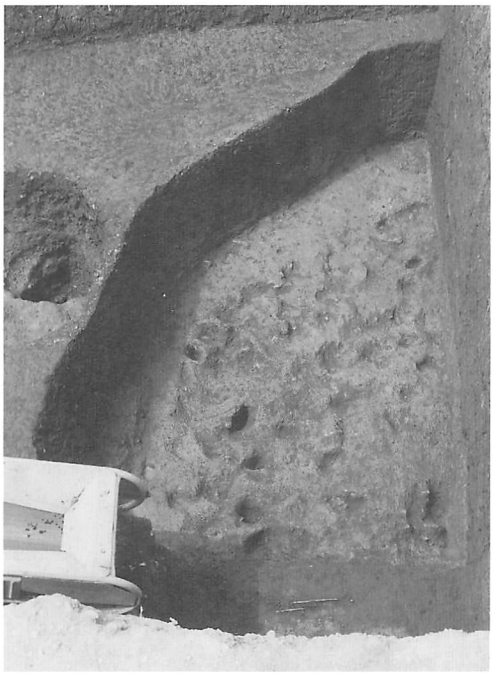
小型の土器片が少量出土したのみである。小片であるため器種などは不明であるが、弥生時代末から時代古墳時代初頭にかけて土器と考えられる。



10号住居跡　平面・セクション図

7 号住居跡　完掘状況

8 号住居跡　完掘状況



9 号住居跡　完掘状況

9 号住居跡　床面出土の炭化材

10号住居跡　完掘状況

第３節　弥生時代末～古墳時代初頭の土坑

概要

検出された土坑は、総数で51基である。これらの土坑のなかで、46号土坑と49土坑は第３章１節に記載したとおりであり、本節ではそれら以外を報告する。

各土坑の説明については、遺構位置、長軸・短軸・深さの計測値、形態、遺物の出土状況、重複関係、特に必要と思われる内容を記載した。重複や撹乱などにより、正確な数値が出せない場合は、（　）をつけて表記し、計測可能部分での数値を出した。実測図・写真については、単体または複数を一括して掲載した。

１号土坑

位置はＢ－９グリッドの南。大きさは68×（62）×28cm。平面は楕円形で、底部は西側で高くなる。１９号土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により１９号土坑が古い。

２号土坑

位置はＢ－９グリッドの南。大きさは95×（65）×19cm。平面は楕円形で、西側に段差がある。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が出土。西側で７土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により２号土坑より新しい。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

３号土坑

位置はＢ－８グリッドの北西。大きさは60×（48）×27cm。平面は楕円形で、壁面は垂直に立ち上がる。４号土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により３号土坑が新しい。

４号土坑

位置はＢ－８グリッドの北西。大きさは84×（52）×28cm。平面は円形で、壁面は垂直に立ち上がる。西側で３号土坑と東側で８土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により３号土坑より古く、８土坑より新しい。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

５号土坑

位置はＢ－９グリッドの中央。大きさは107×（78）×27cm。平面は楕円形と推定され、壁面は緩やかに立ち上がる。南側で６土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により６号土坑より古い。

６号土坑

位置はＢ－９グリッドの中央。大きさは107×（58）×25cm。平面は楕円形と推定され、壁面は緩やかに立ち上がる。北側で５土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により５号土坑より新しい。

７号土坑

位置はＢ－９グリッドの南。大きさは（71）×44×18cm。平面は楕円形と推定され、壁面はやや緩やかに立ち上がる。東側で２土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により２号土坑より古い。

８号土坑

位置はＢ－８グリッドの北西。大きさは（79）×77×25cm。平面はほぼ円形、壁面は垂直に立ち上がる。東側で４土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により４号土坑より古い。

９号土坑

位置はＢ－９グリッドの中央。大きさは69×38×28cm。平面は楕円形、壁面は垂直に立ち上がる。東側で10土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により10号土坑より古い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

10号土坑

位置はＢ－９グリッドの中央。大きさは（92）×91×30cm。平面はほぼ円形、壁面は垂直に立ち上がる。東側で11土坑、西側で９土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により11号土坑より新しい。

11号土坑

位置はＢ－９グリッドの中央。大きさは86×（59）×19cm。平面は楕円形、壁面は垂直に立ち上がる。東側で１２土坑、西側で９土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により１２号土坑より古い。

12号土坑

位置はＢ－９グリッドの中央。大きさは（59）×（57）×22cm。平面は楕円形、壁面は緩やかに立ち上がる。西側で11土坑、南側で30土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により30号土坑より新しい。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

13号土坑

位置はＢ－８グリッドの北東。大きさは86×86×36cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がる。

14号土坑

位置はＢ－８グリッドの北西。大きさは58×56×36cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がる。

15号土坑

位置はＢ－８グリッドの北。大きさは42×40×17cm。平面は円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

16号土坑

位置はＢ－８グリッドの北東。大きさは42×（40）×37cm。平面は円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。東側で18土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により18号土坑より古い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

17号土坑

位置はＢ－８グリッドの北東。大きさは43×41×36cm。平面は円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部に段差をもつ。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

18号土坑

位置はＢ－８グリッドの北東。大きさは33×（29）×33cm。平面は円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。西側で18土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により16号土坑より新しい。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

19号土坑

位置はＢ－９グリッドの南。大きさは59×（49）×24m。平面は円形で、壁面は垂直に立ち上がる。１号土坑と重複し、新旧関係は、断面観察により１号土坑が新しい。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が出土。

20号土坑

位置はＢ－８グリッドの北東。大きさは37×37×24cm。平面は円形、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底部は狭く細くなる。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

21号土坑

位置はＢ－８グリッドの北東。大きさは54×52×47cm。平面は円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部は丸い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

22号土坑

位置はＢ－８グリッドの中央。大きさは43×36×26cm。平面は円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

23号土坑

位置はＢ－８グリッドの中央。大きさは49×44×20cm。平面は円形、壁面はやや緩やかに立ち上がる。

24号土坑

位置はＢ－８グリッドの中央。大きさは40×37×29cm。平面は円形、壁面は緩やかに立ち上がり、底部は丸

い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

25号土坑

位置はＢ－８グリッドの南東。大きさは43×64×37cm。平面は円形、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

26号土坑

位置はＢ－８グリッドの中央。大きさは47×（45）×16cm。平面は円形、壁面は緩やかに立ち上がり、底部は丸い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

27号土坑

位置はＣ－15グリッドの南。大きさは63×56×29cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がり、底部に段差がある。

28号土坑

位置はＣ－15グリッドの南。大きさは60×58×23cm。平面は円形、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

29号土坑

位置はＣ－15グリッドの中央。大きさは65×44×45cm。平面は不整円形、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部は丸い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

30号土坑

位置はＣ－15グリッドの南。大きさは70×58×37cm。平面は不整円形、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底部は丸い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

31号土坑

位置はＣ－15グリッドの西。大きさは74×74×17cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦。

32号土坑

位置はＣ－15グリッドの南。大きさは59×44×46cm。平面は楕円形、壁面は緩やかに立ち上がり、底部に段差がある。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

33号土坑

位置はＣ－14グリッドの東壁。大きさは202×（48）×44cm。平面は推定で円形、壁面は垂直に立ち上がる。調査区にかかっているため土坑西壁部分の一部しか調査できなかった。したがって、ここでは土坑として取り扱ったが、性格は不明である。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

34号土坑

位置はＣ－20グリッドの南。大きさは116×112×77cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がる。底部の北東には深さ50cmの柱穴状の掘り込がある。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

35号土坑

位置はＢ－13グリッドの北東。大きさは（71）×36×20cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がる。北西で41土坑と重複しているが新旧関係は明確ではない。

36号土坑

位置はＢ－14グリッドの中央。大きさは43×36×13cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がる。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

37号土坑

位置はＢ－13グリッドの北東。大きさは43×（21）×18cm。平面は推定で円形、壁面は垂直に立ち上がる。南西で39土坑と重複しているが新旧関係は明確ではない。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

38号土坑

位置はＣ－12グリッドの南。大きさは52×45×22cm。平面は楕円形、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底部は丸い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

39号土坑

位置はＣ－12グリッドの南。大きさは124×（75）×16cm。平面は楕円形、壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦。調査区壁面にかかっており、東側の一部は未調査。

40号土坑

位置はＢ－14グリッドの南。大きさは（38）×37×21cm。平面は楕円形、壁面は垂直に立ち上がる。東側で45土坑と重複しているが新旧関係は明確ではない。

41号土坑

位置はＢ－14グリッドの南。大きさは53×（42）×24cm。平面は円形、壁面は垂直に立ち上がる。西側で41土坑と重複しているが新旧関係は明確ではない。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

42号土坑

位置はＣ－15グリッドの南。大きさは60×（42）×36cm。平面は不整円形、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底部は丸い。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

43号土坑

位置はＢ－14グリッドの南。大きさは76×48×38cm。平面は不整形、壁面は垂直に立ち上がり、底部は丸い。

44号土坑

位置はＢ－14グリッドの南。大きさは80×（54）×24cm。平面は不整形、壁面は緩やかに立ち上がる。

45号土坑

位置はＢ－13グリッドの南。大きさは80×（76）×33cm。平面は円形、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底部は丸い。東側で７号住居と重複しているが、新旧関係は不明。覆土から、30cm程度の礫や、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

46号土坑

第３章第１節に詳述。

47号土坑

位置はＢ－28グリッドの北。大きさは（67）×（38）×33cm。平面は円形、壁面は緩やかに立ち上がり、底部は平坦。

48号土坑

位置はＢ－13グリッドの北。大きさは60×49×20cm。平面は不整円形、壁面は緩やかに立ち上がり、底部は平坦。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

49号土坑

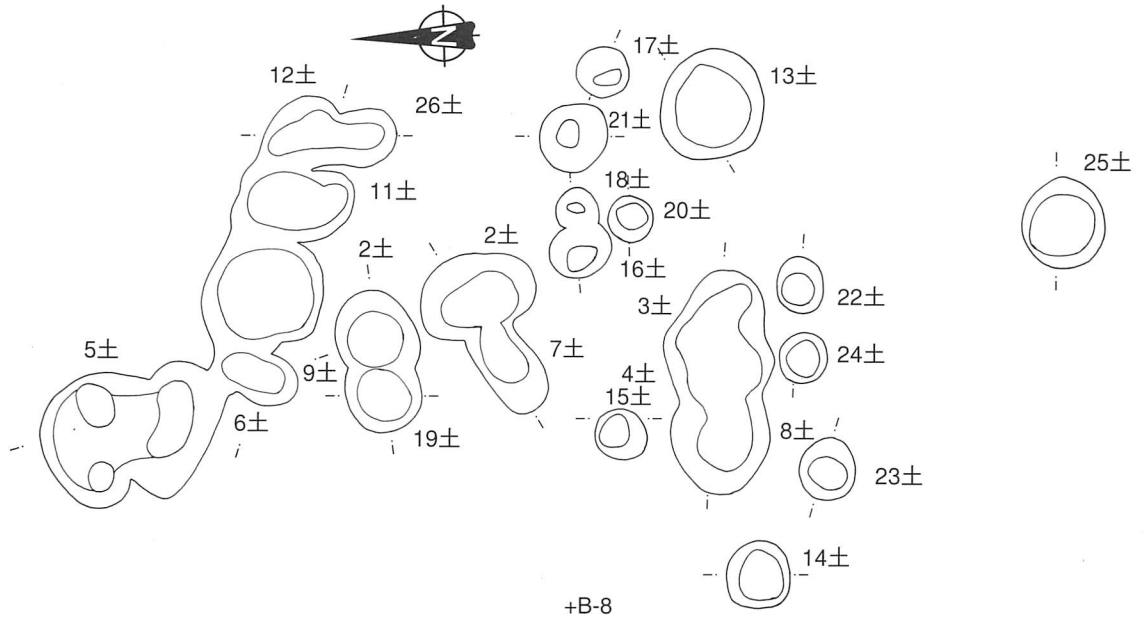
第３章第１節に詳述。

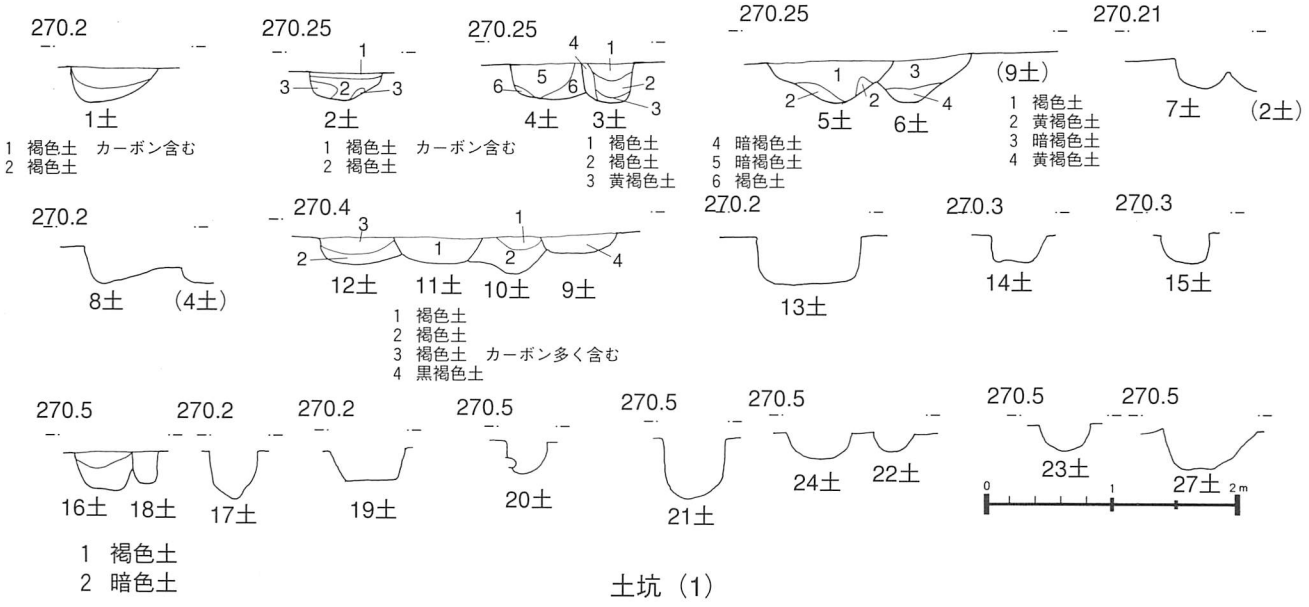
50号土坑

位置はＢ－17・18グリッド。大きさは163×74×22cm。平面は楕円形、壁面は緩やかに立ち上がり、底部は平坦。覆土から、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。

51号土坑

位置はＣ－19グリッド。大きさは315×158×37cm。平面は不整楕円形、壁面は緩やかに立ち上がりる。覆土及び底部には拳大の礫が多くみられ、北東よりには半径30cmの範囲に焼土が集中するが、加熱による硬化面はみられない。本調査で検出された土坑のなかでは例外的に様相をもつものである。遺物は、弥生時代末から古墳時代前期の土器片が若干出土している。



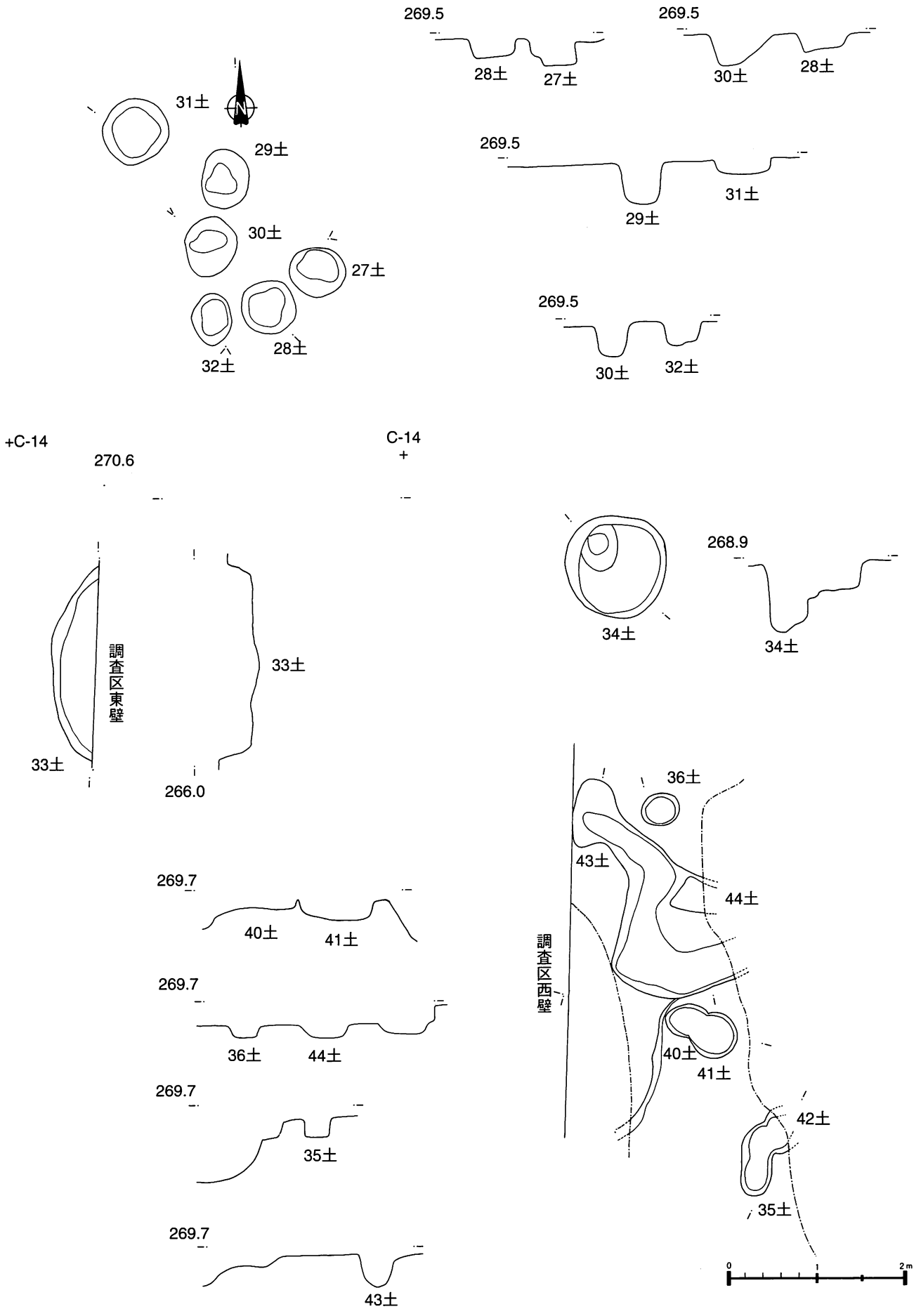


土坑（1）

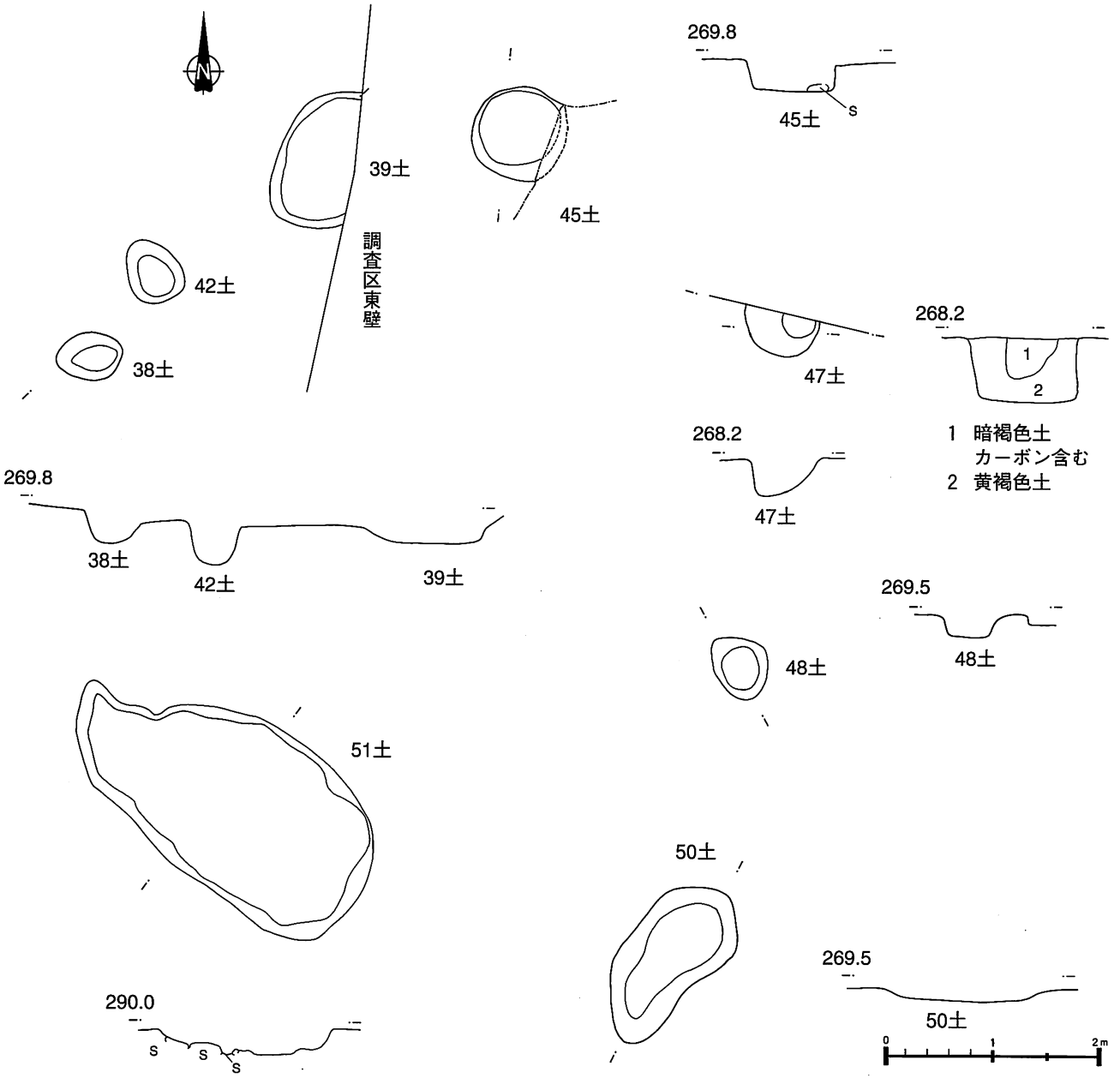
（調査区中央）

（調査区南側）

土坑検出状況


269.5
28土
27土
269.5
30土
28土
31土
29土
269.5
31土
29土
30土
27土
28土
32土
269.5
30土
32土
+C-14
270.6
C-14
+
調査区東壁
33土
33土
266.0
34土
268.9
34土
36土
43土
44土
調査区西壁
269.7
40土
41土
269.7
36土
44土
40土
41土
269.7
35土
42土
35土
269.7
43土
0
2m

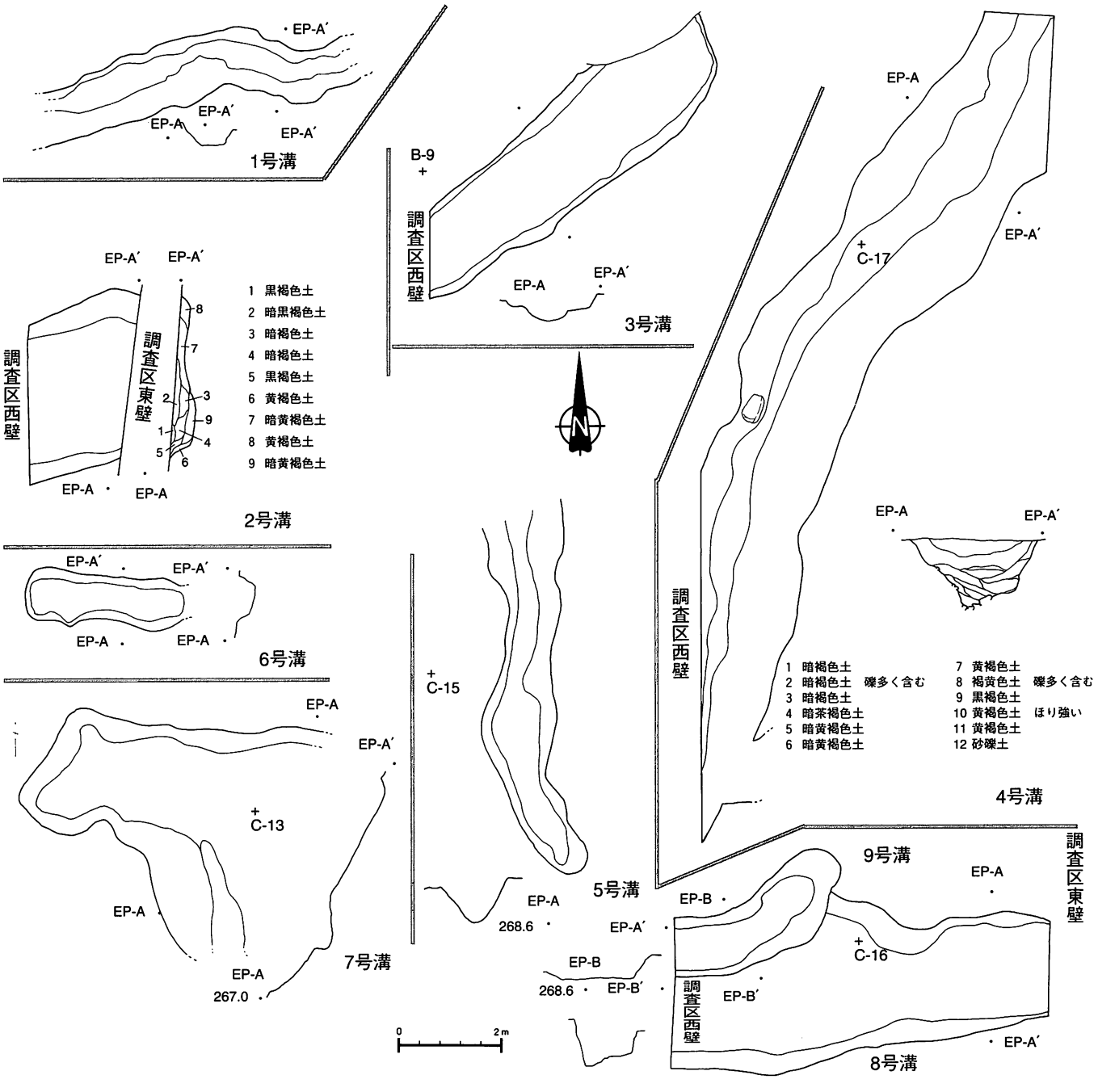
土坑（2）


N
39土
調査区東壁
45土
42土
38土
269.8
45土
S
47土
268.2
1
2
1 暗褐色土
カーボン含む
2 黄褐色土
268.2
47土
269.8
38土
42土
39土
269.5
48土
48土
51土
50土
290.0
S
S
S
269.5
50土
0
1
2m

土坑（3）

第4節　溝・溝状遺構

本書でいう溝状遺構とは、覆土中には弥生時代末から古墳時代初頭の土器片を含むが、溝とは異なり形状が複雑で、掘り込も浅く堆積状況は単層ないしは上下2層程度にしか分類できないもので、場合によっては旧河道など自然物である可能性がある。1号溝は部分的にしか検出できず、両端は自然に消滅している。2号溝は調査区の関係で部分的な調査であった。底部は平坦だが南半分は掘り込が深くなっている。3号溝も調査区の関係で部分的な調査であった。底部は両壁から平坦面が続くが、中央部で掘り込が深くなっている。4号溝は本調査におけるもっとも大きな溝である。壁面は45°で立ち上がるが、東壁は下段でテラスがつき、底部にむかい幅は狭くなる。遺物は弥生時代末から古墳時代初頭の土器片が若干出土している。5号溝は断面V字形の壁をもつ掘り込の深い溝であるが、北側は途中で消滅している。6号溝の東端は重複により消滅している。形状としては整った部類にはいる。7号溝は不明瞭な掘り方で、掘り込も浅い。8・9溝は重複関係にあり9号溝が8号溝より新しい。若干の土器片が出土している。



溝・溝状遺構

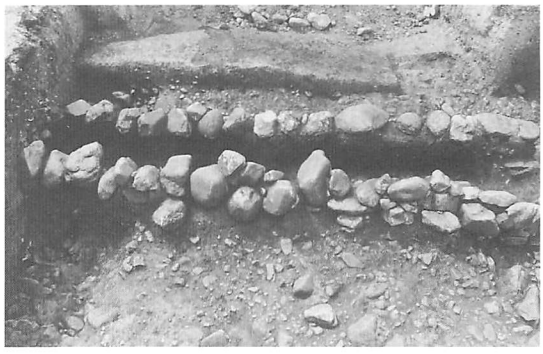
第５節　石積み遺構

調査区の北端に東西方向の石積みが検出された。北端は、南側で主体の時期の土器片は若干散在するが、遺構は確認されず、中・近世を主体に近代化以降の土器類が出土する地域である。

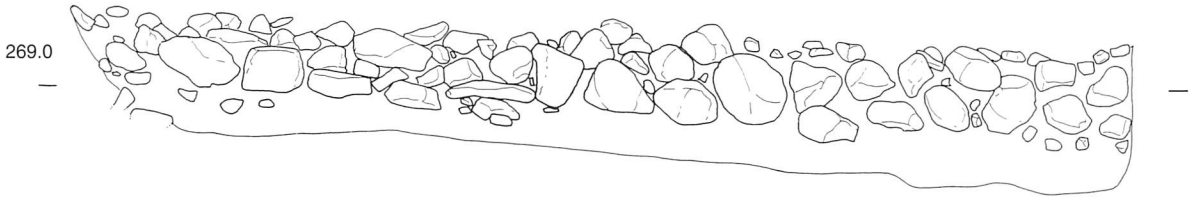
石積みは、長さは5,7ｍ、幅1,7ｍ、高さ0,5ｍを測る。石材は、南北側面では５～50cm程度の円・亜円の自然礫を使用し、加工は一切認められない野面積みである。側面の天端は揃わず、内部の天端は拳大から30cm程度の栗石が敷き詰められ平坦である。栗石は円・亜円の自然礫と割れ石である。

石積みの特徴は、南側面は北側面と比べやや粗雑な積み方で、石尻を内側へ長く使う積み方が認められる。内部は天端から約20cmの栗石と褐色土で構成され、栗石から下は褐色土が充填されている。時期や用途については不明確だが、出土遺物などから中・近世の所産で、絵図などによると明王寺の寺域内で別院があったことが伺えそれらに関する石積みの可能性が指摘できる。

石積み検出状況

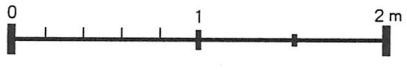


内部栗石除去後



北面立面図

石積み平面図



第6節　包含層の遺物

本節に掲載した資料は包含層中より出土したものである。包含層の遺物（1）には縄文時代、包含層の遺物（2）には弥生時代末から古墳時代初頭と中世以降近代までを掲載した。

1～3は縄文時代中期の土器片である。該期の遺物は調査区南側を中心に出土しており、北側では見られない。掲載資料のほかに沈線や縄文が施文された小片が出土しており、個体となる資料は出土していない。胎土、施文からみて中期後半に位置付けられる。

また、摩滅した痕跡などがないことから流れ込みなどではなく、調査範囲が広がれば、該期の資料がまとまって出土する可能性は十分にある。

4は打製石斧である。本調査で縄文時代に属す石器出土量は少なく、土器の出土状況と整合する。打製石斧は4・5の2点のみで、やはり調査区南側からの出土である。

とりわけ4は大きさからみて特徴的で、器長21,5×器幅9,5×器厚2,2cmを測る。大きさに比べ器厚は薄い。石材は粘板岩製を使用し、基・刃部の加工はあまり積極的ではないが、縁辺部には加工がよく施されている。石鍬と呼ばれ、弥生時代以降に出現する大形の石器に分類される可能性も本遺跡の場合主体となる出土遺物から推測される。

5も打製石斧である。4と比較すると他遺跡での出土事例と同じく一般的な大きさで、器長12,5×器幅6,0×器厚2,5cmを測る。大きさに比べ器厚は厚い。背面には自然面が残り、石材は粘板岩を使用している。

6～14は弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる遺物で、本遺跡の主体をなす遺構・遺物の時期に属す資料と考えられる。

6は壷の口縁部である。表面には縦方向のハケによる成形の痕跡が観察できる。口縁部は外反し、折り返し口縁となっている。

7～11は壷の底部である。7・8は大形で9～11は小形に分類されよう。7の内面には横方向のハケによる成形の痕跡が観察でき、8の表面には縦方向のハケによる成形の痕跡が残る。9～11については摩滅しているものがある。

12～14は台付甕の脚部である。13の内面には横方向のハケによる成形の痕跡が観察できる。12・14については摩滅が観察でき、成形の痕跡は認められなかった。

15～18は中世に位置付けられる資料である。出土地点は18以外は調査区南側のC－14グリッド周辺である。本調査では、調査区北端の石積み遺構が可能性を持つほか、中世に属す遺構は検出されていない。C－14グリッド周辺についても図示した資料がややまとまって出土する傾向にあるが、明確な遺構は伴わない。

15はかわらけの底部である。削りだし高台で、胎土に雲母を多く含む。

16はかわらけの底部である。削りだし高台で、糸切りの痕跡が認められる。表内面にナデによる成形が観察でき、胎土には雲母を大量に含み、非常に緻密である。

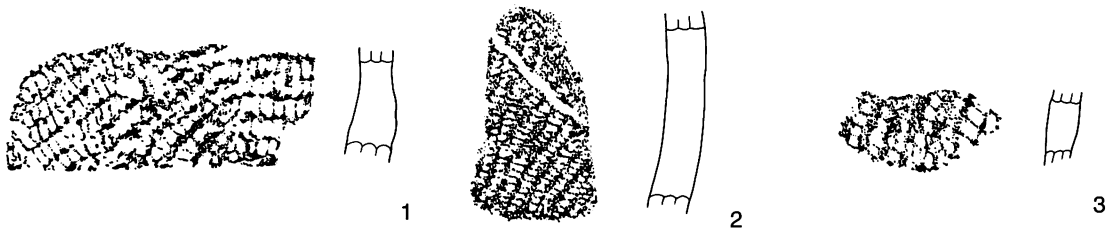
17は灯明皿である。底部に5㎜の穿孔がなされている。胎土は17と同じ様相で、雲母を大量に含み非常に緻密である。表面にはすす状の付着物が認められる。

18は青磁の底部である。高台部分が外側からの加撃により除去されている。14世紀に位置付けられる。

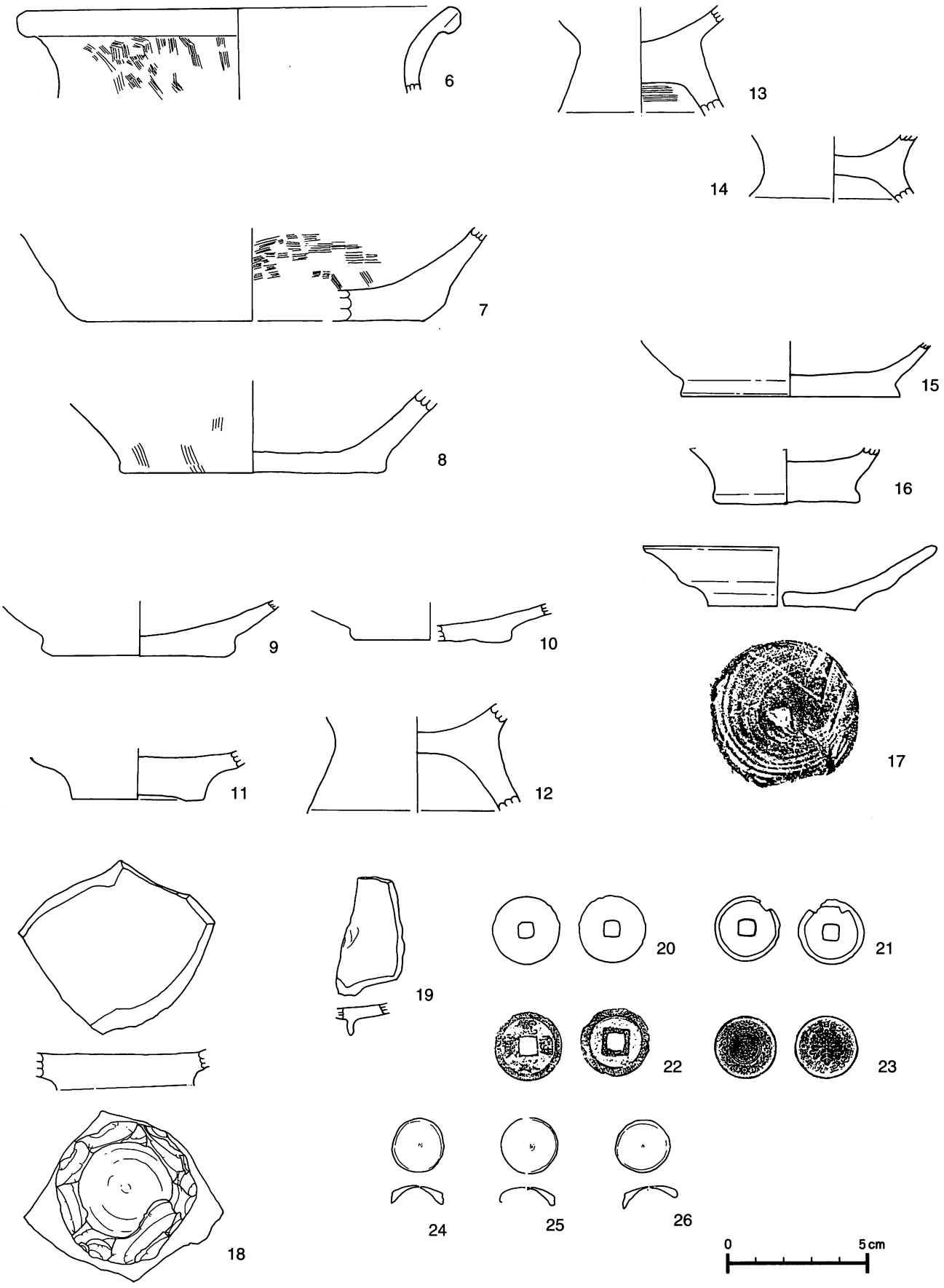
19は青磁の底部である。18よりは新しく近世の所産と考えられる。

20～23は古銭である。20・21は劣化が激しく種類を判断することはできない。22は寛永通宝である。23は大正9年の1銭硬貨である。

24～26は、陶磁器製の紡績機械の部品である。中央部に1㎜に満たない穿孔があり、この穴に複数の糸を通し、1本に紡ぐ役割を持つ。近代化以降の所産である。

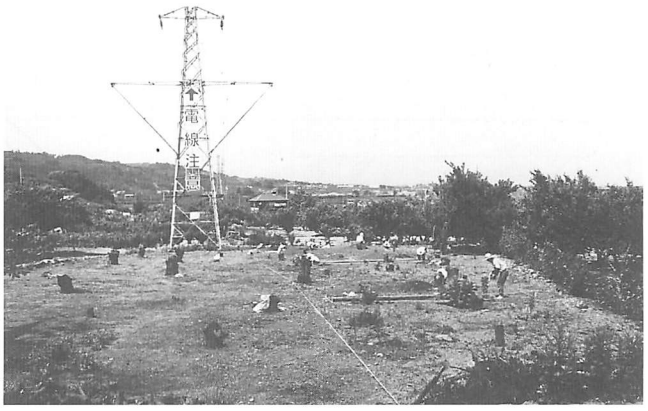


包含層の遺物（1）

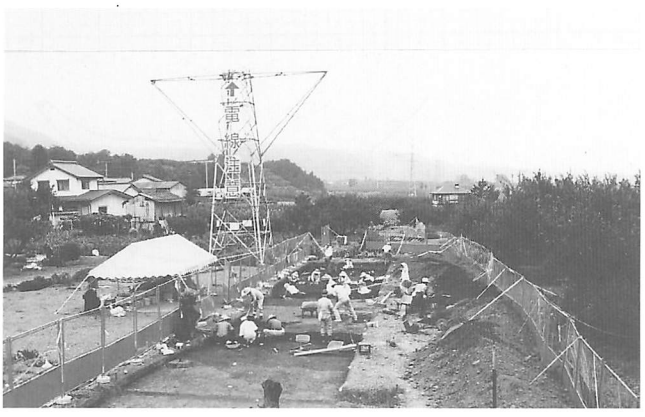


包含層の遺物（2）

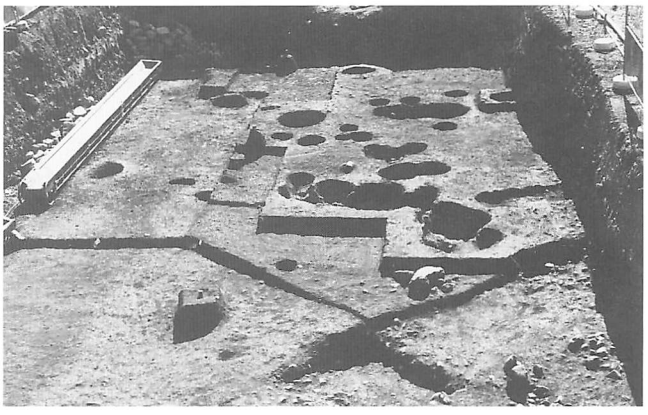
大明神遺跡遠景（西より）



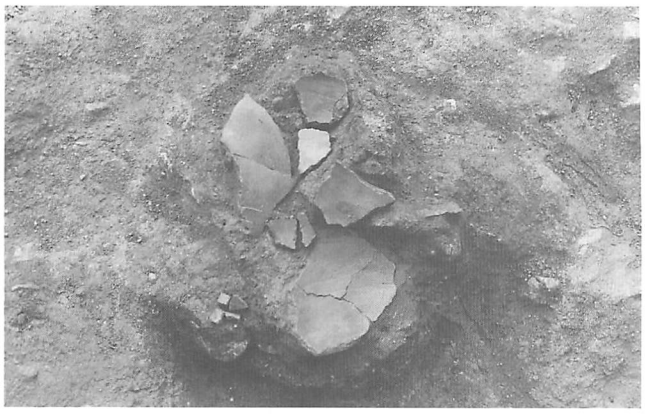
試掘調査時の様子（南より）



調査区南側の調査風景（南より）

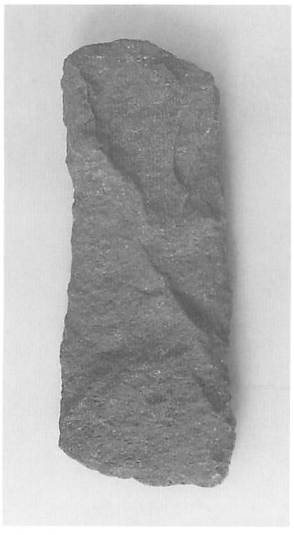


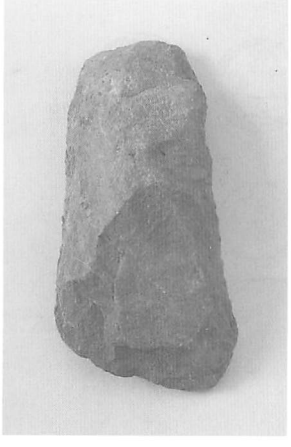
調査区南側の完掘状況（北より）



遺物出土状況（1）

遺物出土状況（2）





出土遺物

熊野神社への参道

遺跡のポイント

はじめに

皆さんが手にしたこの本は、大明神という名前の遺跡を発掘調査し、その結果をまとめた報告書です。

したがって、この本には、大明神遺跡と呼ばれる遺跡の範囲から掘り出された遺物（土器や石器・鉄製品などの道具）や遺構（住居など不動産の痕跡）の実測図や写真が時代順に掲載され、細かな観察事項が書かれています。

出土した遺物は、記録を取り、保管されていますが、遺構はこわされ、すでに道路の下に埋まって見ることはできません。しかし、消えた大明神遺跡は、この本に生まれ変わり、その存在を皆さんへ、そして後世に伝えていく役割をもっています。

1　発掘調査を始めるまで【詳細は第1章1～3頁】

さて、まず最初に遺跡の名前についてです。東京の多摩丘陵など、遺跡が密集する地域は、遺跡ごとに番号を付けて呼んでいますが、多くの場合は、遺跡のある場所の古い地名（字名）を遺跡の名前にします。

したがって、大明神とはおそらく中・近世頃に付けられた土地の名前だと考えられます。

次に、なぜ発掘調査をしたのかということです。山梨県が「富士川西部広域農道」を建設することになりました。そして、建設する予定地を調べていくと、いくつかの場所で、地下に遺跡がある上に道路が建設されることがわかりました。

さらに、そのような場所を実際に歩いてみると、耕作などで掘り起された遺物をたくさん拾うことができました（分布調査）。

その結果、遺跡の規模や時代を知るため、試し掘り（試掘調査）を実施し、やがて建設予定地内の埋蔵文化財を本調査（発掘調査）することになったのです。

2　遺跡の場所【詳細は第2章4～8頁】

大明神遺跡は甲府盆地の西端にあり、山の裾から少し下りたところにあります。地名では南巨摩郡増穂町の春米というところになります。

では、この地域は昔どんなところだったのでしょう。現在は、道路も完成され、甲府盆地がよく見える果樹畑地域です。

最後の頁の地図を見てください。これは、大明神遺跡周辺の地形を簡単に描いたものです。左右に流れるのは川です。また、細い横線は地面の高さ（標高）が10mごとに書かれている等高線です。この地図からは、大明神遺跡は二本の川に挟まれた扇状地にあることが分ります。扇状地とは、川の氾濫により堆積した土砂が作り出した地形のことです。実際に発掘調査して

みると、大明神遺跡は現在の地面から２ｍ以上も下に埋まっており、当時生活していた地面の上下には、砂や礫（石）の堆積した地層が何枚も確認され、何度も水害にあったことが判明しました。

また、☆印は、大明神遺跡以外の埋蔵文化財をあらわしています。特に北西地域には大明神遺跡と同じ時代ですが、もう少し新しい群集墳とよばれる、古墳の密集地があります。周辺地域には、縄文時代から近世まで様々ですが、昔から人が生活していた痕跡が多く残されている地域であることがわかります。

3　発掘調査でわかったこと

大明神遺跡は平成５年と７年に二度にわたり調査がされました。その結果、約6000年前の縄文時代早期の土器や、1600年前の古墳時代前期ごろムラの（村）あと、約900年前の中世・近世の遺物が発見されました。ここでは、時代ごとに特徴を書いていきます。

[縄文時代]【詳細は第３章９～12頁】

縄文時代の特徴は、人間が土器を作り、使い始めたことにあります。

そして、土器の特徴を基準に古いほうから草創期・早期 ・前期・中期・後期・晩期の順番で分けられています。

山梨県では、八ヶ岳周辺や曽根丘陵をはじめ中期（約4500年前）の遺跡が大変多く見つかっています。代表的な遺跡に一宮町の釈迦堂遺跡・櫛形町鋳物師屋遺跡などがあります。

大明神遺跡では調査区域の南側で、早期の土器が出土しています。土器をよく観察してみると、土器の中に植物の繊維が入っていることがわかりました。これを繊維土器といい、粘土で土器を作るとき、割れないように補強のため繊維を粘土に混ぜて焼いたものです。

また、土器の形から、関東・東海地方でよく作られた土器であることがわかりました。

[弥生時代終りから古墳時代のはじめ]【詳細は第３章13～44頁】

大明神遺跡のもっとも中心となった時代です。

当時は稲作が大陸から日本に伝わった弥生時代が終わり、大きなお墓を造り権力者を葬った古墳時代にはいった最初の頃です。

弥生時代は土器の形やそのほかの道具の組み合わせから、古墳時代は古墳の大きさや形などにより古いほうから前期・中期・後期の順番で分けられます。代表的な遺跡に中道町の銚子塚古墳（古墳時代前期）があります。

今回の発掘調査では、調査区域の南側で大きさの推定が６ｍ前後で、楕円形や角が丸く四角い（隅丸方形）住居が８軒と、土坑とよばれ食料などを貯蔵したと考えられる穴が約40基、数本の溝の遺構が確認されました。

遺物では、大変多くの土器が住居のなかや周辺から出土しています。今の皿のようにモノを盛ったりする容器である高坏や煮炊きに使う甕が出土しているほか、銅で作った銅鏃とよばれる矢の先が出土しています。土器は形の特徴から、近畿・東海地方で特徴的な土器が多く出土

し、当時その地域との交流があったことが考えられます。銅鏃の出土も県内では数例目と珍しく、出土した位置や様子から、実用品というよりは厄よけなどに使われていた可能性があります。

[中・近世]【詳細は第3章46～50頁】

およそ武家社会がはじまり、鎌倉に幕府が開かれてからを中世とよび、江戸に幕府が開かれてから大政奉還をむかえるまでを近世といいます。

中世の代表的な遺跡としては、甲府市の武田館跡や塩山市の於曽屋敷、近世では甲府市の甲府城跡などがあります。

大明神遺跡からは、この時期に使われた、磁器・陶磁器が出土しています。色やかたちは、現在の茶わんによく似ていて、古墳時代の土器と比較するとまるで違います。この違いは、粘土の違いや窯で焼くことによるもので、釉薬を使用したり、絵柄を入れたりします。

住居など、直接生活に関係するような遺構は見つかりませんでしたが、調査区域の北側で高さと幅約1mの石積みが発見されました。石積みが作られた時期や目的ははっきりとはわかりません。しかし、江戸時代にかかれた絵図によると、近くに明王寺というお寺があり、石積みの発見されたところは、お寺の別院があった場所とほぼ一致するので、この別院に関係するのもと判断しています。

その他

以上のほかに、時代や目的がはっきりしませんが、溝のほか遺物としては、繊維を1本の糸にまとめるときに使う陶磁器製の道具や、古いビー玉が見つかっています。

おわりに

今回の調査は、道路建設予定地のため、長さは南北100mありましたが、幅は東西8m程度なため、特に住居などはすべてを発掘調査するというわけにはいきませんでした。しかし、発掘調査を実施したことにより、増穂町春米地区の古墳時代のムラの存在を確認することができ、さらに大明神遺跡は東西に広がる大きなムラであることがわかりました。

なお、出土した遺物や掲載した図面・写真などは県埋蔵文化財センターに保管してありますのでご活用ください。また、文中にあげた、代表的な遺跡の出土品は県立考古博物館で観覧することができます。また、下記の現地に博物館などがあるところもありますのでご活用下さい。

[所在一覧]

釈迦堂遺跡	釈迦堂遺跡博物館	東山梨郡一宮町千米寺764　0553（47）3333
銚子塚古墳	県立考古博物館	東八代郡中道町下曽根923　0552（66）3881
武田氏館跡	国指定史跡	甲府市古府中周辺（武田神社）
甲府城跡	県指定史跡	甲府市丸の内1丁目
県埋蔵文化財センター		東八代郡中道町下曽根923　0552（66）3016

慎重に土を掘り、すまいの跡から土器を探します。

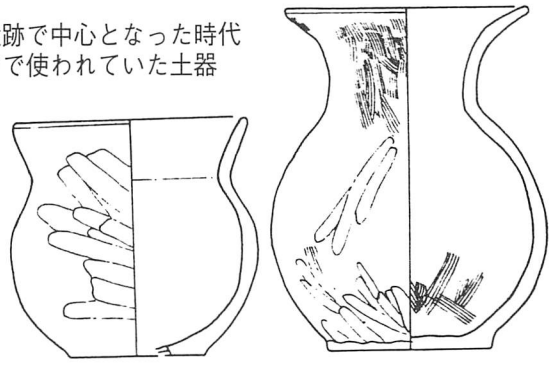
こんな様子で土器の顔がでてきます

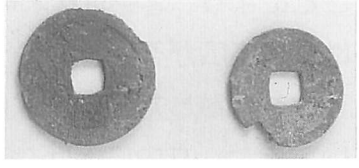
縄文時代の土器と石器（石さじ）

旧石器時代	前期	500万年前	世界最古の人類
		60万年前	日本最古の人類
	後期	3万年前 1,3万年前	
縄文時代	草創期	10,000年前	土器を作ることを知る
	早期	7,500年前	
	前期	4,500年前	
	中期	3,000年前	
	後期	2,000年前	
	晩期	1,000年前	
弥生時代	前期	BC.300	稲作の開始
	中期		卑弥呼の活躍（239）
	後期	AD.300	
古墳時代	前期		
	中期	AD.400	
	後期		大化改（645）
奈良平安時代		AD.900	平城京遷都（710） 平安京の遷都（794）
鎌倉時代		AD.1200	鎌倉幕府を開く（1192）
室町戦国安土桃山時代		AD.1500	室町幕府を開く（1397） 川中島の合戦（1553～） 豊臣秀吉全国統一（1590）
江戸時代		AD.1800	徳川家康江戸幕府を開く（1603）
明治時代		AD.1900	大政奉還（1867） 第１次世界大戦（1914）
大正			
昭和			太平洋戦争（1941）
平成		1996	

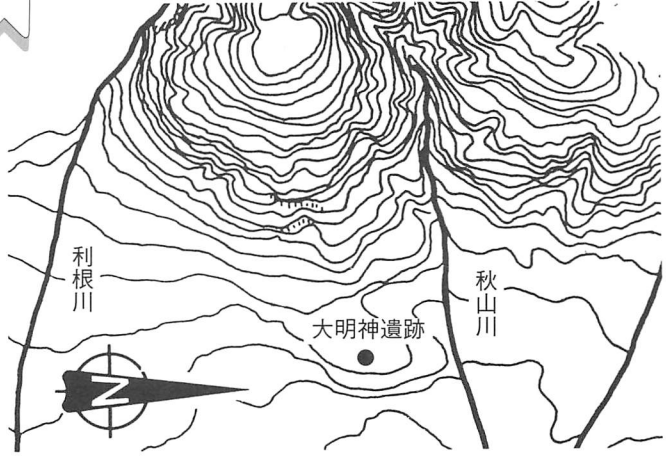
大明神遺跡関係年表

大明神遺跡で中心となった時代のムラで使われていた土器





近世のお金
（寛永通宝）



周辺の地形

大明神遺跡では土器・石器が出土しています。

大明神遺跡のムラで人々が生活していました。

陶磁器や寺院に関する資料が出土してます。

報告書抄録

報告書概要	
ふりがな	だいみょうじんいせき
書名	大明神遺跡
副題	富士川西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第121集
編著者名	宮里学
発行所	山梨県埋蔵文化財センター
住所	〒400-1508　山梨県東八代郡中道町下曽根923　電話055-266-3016
印刷所	(株) 峡南堂印刷所
印刷・発行年月日	平成７年３月２４日・平成７年３月３１日
遺跡概要	
所在地	山梨県南巨摩郡増穂町春米字大明神
地図名・位置・標高	鰍沢（２万５千分の１）・北緯３２度４４分・東経１３８度４５分・２７０ｍ
主な時代	縄文時代早期・弥生時代末～古墳時代初頭・中～近世
主な遺構	住居跡・土坑・石積み
主な遺物	土器・石器
特記事項	弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第121集

大明神遺跡

－富士川西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－

印刷日　1995年3月24日

発行日　1995年3月31日

編集　山梨県埋蔵文化財センター

発行　山梨県教育委員会・山梨県農務部

印刷　（株）峡南堂印刷所